



Title	近代市民社会の形成とPublic Healthの展開 I. 近代的個人の胎動
Author(s)	河口, 明人
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 119, 69-103
Issue Date	2013-12-25
DOI	10.14943/b.edu.119.69
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/53818">http://hdl.handle.net/2115/53818</a>
Type	bulletin (article)
File Information	AA12219452_119_04.pdf



[Instructions for use](#)

# 近代市民社会の形成とPublic Healthの展開

## I. 近代的個人の胎動

河 口 明 人 \*

### 【目次】

1. はじめに—Public Healthについて—
2. 近代的個人と Public 概念
3. 近代の条件—人権思想—
4. 宗教改革における個人—良心への服従と自己確信—
5. 科学革命における個人—宗教との相剋と共闘—
6. 民衆の覚醒と科学者の変貌
7. 歴史的動因としての疫病

【キーワード】 公衆衛生, 近代的個人, 人権, 宗教改革, 科学革命

### 1. はじめに—Public Healthについて—

我が国では, public healthは「公衆衛生」, maternal healthは「母性衛生」,あるいは occupational healthは「労働衛生」というように, healthが,「衛生」という言葉に翻訳されてきた歴史がある。しかし衛生とはhygieneもしくはsanitationであり, 衛生という日本語訳は, 人々の健康が, 主に衛生環境に大きく依存していた時代の遺物であり, 今日では明らかに適切とは言いがたい。主な死因が感染症から慢性疾患に移行する疫学的変遷 (epidemiological transition) をとげた現代の多くの国々では, 健康に関する議論は, 衛生環境の改善という側面を遙かに超えて, 人々の行動パターン (behaviors) としての生活習慣や, その行動を規定する社会的, 経済的, あるいは政治的な構造的要因にも拡大している。衛生的観点は, 人間が微生物を含めた地理的・物理的棲息環境との密接な相互関係の中でしか生存できないという点で依然として重要であるが, もはや「衛生」という言葉で健康 (Health) を包含することはできない。

突然発症し, 急速な経過を辿り, そして多くの場合は回復する感染症のような疾病への理解は, 一方で, 何一つ異常のない良好な状態を想起させ, 「健康」と「病気」という二元的な考え方を醸成してきた。その考え方は社会政策にも具現化され, 我が国の健康診断は, 病気ではないという理由で医療保険の適用外である。しかし, 疾病の否定によって対照される健康の理解は, 生命というものが, エントロピー増大という熱力学の法則に逆らいつつも, そのために常に死へのベクトルを内蔵し, その「病理的」過程の対立的構図のなかでしか存在しないという人間の生理的環境を理解しているとは言い難い。とくに今日の最大の人間の死

\*北海道大学大学院教育学研究院・健康科学・特任教授

因である慢性疾患(とくに生活習慣病)は、ある日突然発症する疾病ではなく、むしろ生活過程そのものに内在する継続的かつ蓄積的な病態に起源するものであり、発症はその終末像に過ぎない。心筋梗塞や脳梗塞の発症に至る動脈硬化症は、慢性的な血管の劣化や障害の帰結であり、幼少期から潜在的に継続する長年月の日常行動や食生活や習慣行動が危険因子の背景を形成し、症状出現以前の病変形成そのものの発症時期などは特定することはできない。この加齢にともなう不可避的な病理過程—それは微視的には、血管障害にかかわる攻撃因子と防御因子の極めて生理的な相互作用—を認識することや、ましてやそれらを細部に亘ってモニターし、認識することは困難であり、さらに病態の予防対象である日常習慣が、それを意識する以前に形成されてしまうという生活史的な構造は、予防という態度に限界があることを知らしめる。結局、加齢に伴う人間の身体的・精神的劣化は避けられず、人間の死亡率は100%であり、予防戦略は究極的には敗北する。生命の終末である死は熱力学の法則を満たす。死という乗り越えがたい現実に対し、その現実には変更の余地はないとしても、また既知の危険因子への予防的態度は依然として堅持されるべきであるとしても、死を特別の事象として忌避し恐怖する姿勢は、私たちが、生と死を、健康と病気と同様に、全く別次元のものとして考える態度に起因し、それはまた無症状を健康と錯覚する生活態度を醸成している。

20世紀の医学生理学の発展は、疾病論や治療法を確立することによって、人間を健康者と患者に分断し、あるべき健全な理想像を幻想させてきた。しかし医学・医療は、積極的に診断・治療を行うが、一度も健康を積極的に定義したことはないのである。かつ疾病は非日常的な事象と捉えられ、非日常の病院に結びつけられた患者の治療法や臨終の扱いは、点滴やモニターの装着によって動物的となっている。死亡率100%という意味において、不可避的な日常であるはずの人間の死は、日常から隔離・拒絶され、医学的に診断されなければ「死」とさえ認められず、死は病院で行われる臨終の儀式的宣告の瞬間に焦点化されてしまっている。人間のいのちを心臓の動きであるとするアリストテレスの古典的な思想に賛同する人々に、心電図モニターが人間の死の瞬間を告知するにしても、しかし、死は、生と同様に過程である。さらに、継続的かつ間断なく生起する微視的相互作用としての病理過程を抑止することは殆んど不可能であり、病理的相互作用に介在する「攻撃因子」は、状況が変化すれば「防御因子」に変貌する<sup>1</sup>。すなわち、生理的—病理的過程にかかわる諸因子の善悪や白黒を固定化して考えられるほど「生命」は単純ではなく、また人間の生命を臓器に還元することは、その延長線上で人間を取り扱っていることに等しい。

かくして、与えられた諸条件・環境との適切な共生を目指す戦略は、health promotionという概念を産み出し、健康は、疾病の有無によって区別される状態概念から、より健全であるために日々努力すべき獲得概念に高められた<sup>2</sup>。いかなる疾患や後遺症があったとしても、その現実を前提としながらも、個々人にとっては明日への生活者として、よりよい健康への「努力」がありうる。この文脈から、健康の主題はもはや「予防」ではない。すなわち、疾病や健康障害は、外在的な要因によってもたらされる生体の攪乱や危機なのではなく、社会や自然という外部環境と、本人の社会的行動を作用因とした個的人間の生体恒常性(homeostasis)ないし内部環境(internal environment)との一連の相互作用として現象しているものである。そこには多感な動物である人間の心理・精神作用も介在する。その現象を、死に至る過程とみるか、生きる過程とみるかによって、健康状態も疾病状態も記述可能である。しかし、間断なく継続する現在を、未知の将来に向かって健全化しようとする健康増進は、作用因と

しての自身を巻き込む動的な概念である。人間の生命過程は死まで静止することはない。したがって時間概念の付属しない健康は存在しない。そこには、生命に対する所与の、外在的な環境が前提とされているのではなく、自分を取り巻く一切の環境は、自分の生誕とともに生じ、生活とともに変貌し、そして個的には死によって消滅するという個的な生に関係づけられたものとして現象している。たとえそれが個人的には手に負えない天体の構造であっても、あるいは目の前の草花であったとしても。

18世紀末の種痘法の開発以来、医学・医療は、一人の人間がその人生に遭遇しうる主要な感染症に対する予防戦略を、予防接種という形で社会に定着させ、さらに20世紀には抗生物質を発見・精製して感染症の「克服」に大きな進歩を遂げた。感染症の病因の科学的解明(病原体、抗原)から治療法(抗生物質、ワクチン)までを蓄積し、かなりの程度で、感染症に対する予防および治療効果が期待できる時代となっている。しかし、現代の私たちが利用する抗生物質による細菌に対する一時的な「勝利」は、一方でかならず細菌の進化を促す。多剤耐性菌はその典型であり、細菌は自らの生存原理にしたがって、すなわち細菌として存続するために生存に困難な環境に打ち勝つ新たな変異体となって次世代を創造する。それが生物一般の適応性であり、厳然として機能する生存競争における種の生命力である。細菌の進化は、今後とも抗生物質を乗り越えて生き延びる細菌を創造しつづけるだろう。すなわちそれは、人間の意図とは裏腹に、人間による細菌の遺伝子変異の誘導といってもよく、その細菌の「進化」が将来の人間にどのような結果をもたらすかは未知である。重要なことは、次々と崩壊する膨大な生命を、大地に還元するのは細菌の役割であり、人間がいなくとも生命界は存続しうるが、細菌なしに生命界は存在しえない、ということである。

感染症予防や多様な衛生学的な改善は、今後も継続的に維持・進展することが期待されるが、しかしその人間の意図に反し、最も基本的な生存環境の要素である空気、水、土壌などの自然環境は、人間そのものの活発な活動によって劣化の一途を辿っている。つまり自己の生存環境の破壊に向かって一生懸命に努力している人間という逆説がある。今日の地球温暖化や気候変動に伴う自然災害とそれに伴う生活破壊、あるいは生態系変化に伴う疾病の拡大・変貌は、持続性の危機として意識されているが、それをもたらしたものが人間の活動であるという逆説に人間は方途もなくたじろいでいる。莫大な人命を狙うようにアジア・アフリカなどでくすぶっている鳥インフルエンザやSARS (Severe Acute Respiratory Syndrome) などの新興感染症は、新しい病原体との遭遇であり、人間の生活圏の拡大を示唆するとともに、人間活動による環境の変化に応じた微生物の生息環境の変化を意味している。高度な産業社会がもたらした今日の持続性の危機とは、外在的な自然環境の意図せざる変化によってもたらされたのではなく、人間自身が内包した歴史的過程の帰結である。現代社会を生み出したものが、人類の本能に根ざした活動であると仮定しても、本能が常にその種の生存に有利であるとは限らない。人間主体の世界観や生命観は、人間に対する利用価値や脅威に応じて、他の生命を序列化してきた。しかし、持続的生存の危機は、多様な形で細菌を含めた他の生命と共生する生態系の中でしか、健全な人間の生存もないことを教えている。一方で、社会的心理性をたかめた動物である人間の「疾病」には、日々の不安・怒り・敵意などから抑うつ状態にいたるまで、多様な精神状態や疾患が含まれ、それらは複雑化する現代の社会が原因となっており、個人では克服しがたい社会構造や制度によって助長されている。すなわち健康とは、決して個人的課題なのではなく、社会的存在としての人間の生存能力と、人間が作り上

げてきた社会環境との歴史的な相互作用の現在的帰結として把握する必要がある。私たちにあって、地球なしには一切が無であり、人間の生存や健康の議論なしに、一切の議論は成立しない。この意味で、健康は、世界的かつ社会構造的な課題と対峙しており、したがって広範な学問を巻き込む人間の生存学として再構成する必要がある。

近代におけるpublic healthの思想は、新たな社会の価値観と道徳律を目指し、人々の生活様式を規定する重要な態度変化をもたらした社会思想の背景をなしている。18世紀～19世紀の人間の重大な死亡原因であったコレラや発疹チフスなどの感染症と、それを助長する衛生環境の改善、予防に焦点があったため、public healthは「公衆衛生」であったし、種々の歴史的過程を経て、今日の社会制度の根幹にもなっている。しかし社会的レベルで健康(public health)を保障しようとする思想は、19世紀後半の病原菌の発見・同定に伴う細菌学や感染症概念の成立に先行していた。それはとくに産業革命を転機に大きく変貌していく社会が産み出した都市に流入した人々の劣悪な生活環境とともに成長したものであるが、病気や死亡の原因としての衛生環境に焦点があったというよりも、それらを改善する権原が失われている人々の自由や平等という社会的権利主張とともに成長したものである。

私たちが「生存」に言及するとき、それは瀕死の生存を意味しているのではなく、常に健全な生存を意味している。疾病や病気は常に個人に表現されるとはいえ、public healthの思想は、「すべての生命は保存されなければならない」<sup>3</sup>という明晰なロックのこばに象徴されるように、社会を標的とし、同時に、寡黙な公衆の、しかし基本的人権を具備すべき(近代的)個人の登場を意味していた。この市民社会とpublic healthの思想の近代史における展開を理解することは、孤立した個人の身体的健全性に矮小化された現代の健康の概念を清算するために重要である。とくに、人間関係を含む社会の構造的因子こそが、今日の私たちの最大死因(生活習慣病)であるという現代的課題—Social determinants of Health—を考えると、public healthの思想が、人々の健全な生存と健康のための社会変革の思想であることを再認識させてくれるのである。すなわち近代のpublic healthの思想は、“大衆一般の衛生状態の改善”という意味よりは遙かに深く、死を招く惨状に苦しむ人々を「人間」として確認し、個的生命の、代替不能であり、かつ比較不能の価値や尊厳を(基本的)「人権」として発見し、それを保全しつつ、市民の福祉や安寧を向上させることを目指した市民社会の思想の母胎なのである。なぜならば、生存と健康は不分離であり、基本的人権は直接的にせよ、間接にせよ、人間の生存に密接に関わるものであったからである。法学者が現代社会の基本的人権の類型をどのように分類しようとも、歴史的に形成されてきた「基本的人権」の概念は、近代市民社会であるかぎり、いかなる国家形態にも先行する普遍性をもち、そして人権概念そのものを成立させる最も基本的な内容として、健全な身体と精神を保全すべき「生命権(生存権)」と「健康権」が存在する<sup>4</sup>。

近代的思想としてのpublic healthが、人権思想とともに成長したことは、歴史の中に見取ることができる。ヨーロッパ中世(14世紀)の黒死病の猖獗以来、イタリアの諸都市は社会の防衛のための強制力と実効性をともなったものとして、船舶の入港を40日間留め置く制度や、都市間を移動する人々が不感染で健康であることを証明する居住自治政府発行の安全衛生通行証の提示を求め、物流や人間の流れを監視する公衆衛生担当部署を配置した。その有効性が確認されるとともに、その諸制度は多くの都市、社会あるいは近代国家にあまねく拡大し、今日の検疫(Quarantine)やパスポートという国際的制度に繋がっている。しかしこの時代

の都市の防衛的施策は、封建的支配者の利益を約束する「社会」の防衛であり、社会秩序の維持の主眼は、支配階級の幸福や福祉のためのものでしかなかった。感染した人をもつ家人は、健常であっても家に封じ込められ、隔離されて戸外にでることは許されず、脱走すれば殺されたのである。そこには人権という概念はなかった。17世紀(1664-65)のロンドンで発生したペストにおいてすら、デフォーはその状況を次のように書いている。(感染者の)「家屋の閉鎖ということは、はじめは残酷で非道な処置として大いに世人の反感を買い、閉じ込められたかわいそうな人たちは実に悲痛な叫びを訴えたものであった。」「家人のうちの健康者は、もし病人のそばを離れてよそへ行くことさえできたら、命は助かるかもしれないのだ。たくさん人間が、この悲惨な囚われの苦しみのなかにもだえ苦しみながら死んでいった。」「<sup>6</sup>したがって、閉じ込められた人々は監視人を殺害して逃亡するものもあった。「嚴重に監禁されることの苦しみが結局人々を自暴自棄におちいらせ、前後の見境もなく家から飛び出させたのである。」「<sup>7</sup>しかし閉鎖家屋から脱出はできても、結局だれも近寄らず、ゆく当てもなく、多くの人が野垂れ死にしたという。「社会」の防衛の大義のために、健常人々を見殺しにするこれらの状況は、トゥキディデスが「歴史」に描出したように、ペロポネソス戦争開始直後のアテナイの疫病流行時(BC.429)にも、あるいはボッカチオが「デカメロン」に記しているように、西欧の黒死病の時代(1348年)にも観察された普遍的な事象である。

近代市民社会の思想は、人権思想に直結している。それは、人々のありうべき生存が、個的努力では克服できない社会的・歴史的條件に阻まれていたからである。近代のpublic healthの思想とは、世襲的階層的社会が分裂し、新興階級が社会の実権を掌握し、自由放任の思想を背景に、市民的自由の拡大によって個々人が共同体から遠心的に解体され無防備になっていく渦中であって、人命の保全やそれを保障する衛生環境の保持、あるいはその制度的改善は、政治や行政が責任をもって解決すべき課題であるという求心的な思想に根ざしていた。これは、public healthの思想が現実的で強力な社会思想であったことを如実に物語っている。そこには少なからず葛藤があることも確かである。イギリスの改正救貧法(1834年)による悪名高いワークハウス(労役所)のように、貧困者が自助自立のために努力することを半ば強制し、その中央集権的な「公益」の追求という視座のために、人々の個人的自由を束縛し、中央集権的専制主義の片棒を担ぐ思想のように受け取られた感がある。今日においてさえ、深刻な感染症—たとえば鳥インフルエンザ—の拡大を防ぎ、社会を防衛するために、国家は感染者もしくは疑似患者を隔離し、個人の行動を制限する必要があるために、個々人の「自由」を、あるいは「privacy」を侵害する。こうしたpublic healthにかかわる疫病のコントロールにかかわる強制力は明確に権力の表現であり、それは今日でも変わらない。しかし、それでも近代的概念としてのpublic healthに含意されるものは、公衆としての共同体の構成員の健康という意味以上に、近代市民社会において、人間的尊厳を有した自律的個人(public)の健全な生存を前提とした自由や平等が活力ある社会を建設する、という近代市民社会の理念が同時に宿っているのである。

人間の生存が、必然的に健全な生存を意味するかぎり、public healthの基本思想とは、市民社会の形成過程が産み出した人間の生存権や生命権を背景に、市民の厚生(wellbeing)や福祉(welfare)を目指す概念であるばかりでなく、個的能力の発見と発露を促し、市民の創造的成長を希求する基礎概念であり、個々人の生きる価値という意識から派生する基本的人権や、生存において平等であるべき社会環境の希求、あるいはそれを保障するための政治的自由を

主張する根拠ともなった社会思想である。平等の思想は、生命に優劣はないとする最も基本的な認識に淵源する。この点で、public healthの思想は、社会の政治的改革を迫った18世紀を中心とする近代啓蒙思想と密接な関連があった。社会思想は、常にその時代の要請に応えるべき課題を準備するという意味において、啓蒙の世紀は、私たちに教えるものが多い。とりわけ、今日大いに誤解されているイギリスの功利主義思想に表現された「最大多数の最大幸福 (the greatest happiness of the greatest number)」というスローガンは、簡明かつ廉直で、革命的な目標でもあった。ここで「多数」と表現された人々 (public = 公衆) は、人間の身分評価などの歴史的に形成されてきたいわば後天的な社会的現象としての肩書きは切り捨てられ、同じ快樂原則と行動原則をもつ「生まれながら」一人の人間として「平等」に算定されている。それは、一切の中世的、封建な桎梏から解放され、生命の価値や権利において平等であり、自己の能力の発現において自由であるべき個人という認識を前提としていたばかりでなく、自由や平等を越えて、その人々 (public) の「幸福」の最大値を社会の目標に置いたからである。その原則・原理とは、1789年に勃発したフランス革命の「権利宣言」の中に明文化された「人の譲渡不能かつ神聖な自然権」あるいは「人の消滅することのない自然権」<sup>8</sup>に呼応するかのようになり、同年に出版されたベンサム<sup>9</sup>の書物のなかで、次のように表現された。「自然は人類を苦痛と快樂という、二人の主権者の支配のもとにおいてきた。われわれがなにをしなければならぬかということを示し、またわれわれが何をしようかということを決めるのは、ただ苦痛と快樂だけである。(傍点原文)」<sup>9</sup>その人間の本性の前には、すべての人間は平等に自らの原則の奴隷である(功利性の原理)。この変更すべくもない人間認識を基礎として、新たな社会への新たな道徳律を探索した一連の近代の思想は、個人を究極の単位と見なし、かけがえのない公衆 (= 個人) が劣悪で恣意的な制度のために虐げられ、あまつさえ死に至らしめられているという明確な認識に裏付けられていた。19世紀の半ばであっても、イギリス、日本、フランス、そして世界(平均)の平均寿命は30歳代であった<sup>10</sup>。社会階層別に見るとさらに惨状は歴然としている。1840年のリバプールの地主、商人、そして労働者の平均寿命は、それぞれ35歳、22歳、15歳だった<sup>11</sup>。つまり「最大多数の最大幸福」という基本思想は、今日からどれほど歪に見えようとも、人間はどのように扱われるべきであるかという人間の尊厳に対する意識を背景に、大多数の人びとの幸福、安寧、健康こそが、国家や社会の発展の目的であるという確信に起因していたのである。

## 2. 近代的個人と"public"概念

近代のpublic healthを論じるときに、避けることができない重要な課題が"public"の理解である。"public"とは一般に「公衆の、公共の」と翻訳され、社会を構成する構成員全体を意味しているが、それは近代の市民社会の形成と同時並行的に成長したprivateな「個人」の形成を前提としている。つまり近代的個人は、自らのうちに"public"と"private"の二面性を不可欠の属性として併せ持つ主体として18世紀に登場する。事実、公衆 (public) という言葉は、世人 (mankind) を意味していたものが転化して、17世紀のイギリス (public) やフランス (le public)、それより少しおくれて18世紀のドイツ (Publicum) に発生した<sup>1</sup>。それ以前の中世封

建社会において、"public"という概念がなかったわけではないが、しかしそれは支配層の恣意的な権力の行使を、社会的な影響力が大きいため「公印」や「公札」として認識しただけであり、近代的個人の成立とともに、その内実としての個別の個人的な権利を前提とした近代社会における"public"とは異質なものである。

近代のpublic概念の獲得は、その成長とともに同時的に分化するprivate概念の成長を意味し、その内部においてpublicとprivateな分裂的側面を有する社会的存在としての近代的個人の確立を意味している。公開の義務はなく、多くの場合、他者の拘束や国家の干渉を排除する領域を意味する"private"で表現される「私的な」あるいは「個人的な」という側面と対比すれば、"public"で表現される領域は、近代市民社会の骨格として、生命、自由、財産の保全などの基本的人権が法的に保障され、社会一般に公開され、市民のすべてに平等なアクセスと権利が保障されている領域を意味する。その政治的あるいは法的な前提は、契約論的な考えにしたがえば、共同体的、あるいはゲマインシャフト的な個人が有していた一連の権利を、近代的人間関係をもつ社会のために放棄、あるいは委譲した権利の集合体である、という根拠によって権威づけられている<sup>2</sup>。したがってpublic概念は、その社会の集団的、政治的意志の決定方法としての民主主義の原理にかかわる。公権力(public power)は、その時代の社会的ヘゲモニーを掌握する集団によって行使されるが、最早近代社会においては、公権力は、それを支える本質的なpublicな社会的地平を、原理的には越えることができない。委託された個人個人の権利が公権力を構成している限り、公権力は、その根拠たる人びとを当然にも越えることができない。近代における市民革命の本質は、その時代の政治的ヘゲモニーを行使する集団が、多様な社会的権利に目覚めた「市民」、すなわち近代的個人を適切に処遇しないためにおきた、近代的個人による政治的変革であったといえる。したがって、近代の市民社会の形成過程とは、近代的個人の成長という観点からは、publicとprivateの内的な分裂過程として、近代国家あるいは社会の成長の観点からは、publicとprivateな地平の政治的、社会的組織化の過程として、いずれもpublic概念の成長の過程に必然的に随伴する現象として論じることができる。近代をそれ以前と分かつ「基本的人権」の思想は、この過程と密接にかかわり、一方では国家や社会から拘束されないベクトルを有しつつ(人身保護・思想・信教・言論の自由など)、他方では国家や社会に請求するベクトルを有する(生存権や多種の社会権)。Publicな地平では、誰も自己の利益追求を基盤にした無制限・無干渉のprivateな権利を主張できず、しかし一方で、いかなる弁明も必要とはせず、個人がもつ市民としての権利は、彼らが自身が委任した権利を担保にしているが故に、社会的(ないし国家)主権によって法的に無条件に保障される。保障するのは彼らの意志を表現する法である。近代的個人が享受するpublicおよびprivateな両面の属性と、その法的権利なしに近代の市民は成立しない。この内的分裂を経験し、(近代的)個人の自律を確立する歴史的過程が、近代史の内的論理である。

Public概念は、近代的個人(市民)が有する公共の(個人的)属性であるために、民主主義の基本概念である人民主権を約束するものであるといえる。近代のすべての政治的スローガンの背後には、内的分裂の緊張関係を属性とする個人が、自己の権利の一部分を放棄する代わりに、国家や社会からの干渉を排除する権利を国家や社会に向かって要求する「個」の独立を希求する思想が生き付いている。国民主権の概念は、自立し、平等であるべき個人個人の放棄した権利、しかしてpublicとして万人に保障されるべき権利の集合体として演繹され、かつ市民が放棄した個人個人の権利は、集団としての彼ら自身の社会的、共同体的福祉や健康や幸福と



いう公共の目的に合致することのために放棄されたものである。この意味でpublicとは、法的に保護されるべき政治的な市民性(civil)という意味に近く、そして「市民的(civic)」という言葉は、現代私たちが使っている社会的(social)という言葉とほぼ同義語だった。』<sup>3</sup>

近代的な個人の発生はブルクハルトの指摘のように<sup>4</sup>、イタリア・ルネサンス期に求められることが多く、それは、人間的特性を様々に表現したギリシャ文化に触発され、人間の多様性と自由性を表現する個性的な人間群(homo universal)を生み出し、高い芸術的能力を示し、あるいは数学的、科学的認識をもち、以後の科学革命の方向性を誘導した個性を輩出した。この意味で、ルネサンスと科学革命は分離できない。個性的なルネサンス人は、それでも大局的には、支配層にパトロネージされなければ存立できなかったし、社会と対立した訳ではなく、また社会改革のベクトルを持っていた訳でもない。ただルネサンス期を通して出現した新しい人間類型は、あたかも歴史が個人によって創られるかのような、なにものにも拘束されないという自発性と人間の個的能力を明確に体现していた。しかし近代のpublic healthに含意される「public(公衆)」とは、ルネサンス的個性における個人的な有能性や可能性に焦点があるというよりも、かつて恣意的に処断された個々人の生命の尊厳性(dignity)や代替不能性(irreplaceable)という人間存在そのものの匿名的価値意識に焦点がある。かつその個々人の「理性」に、彼自身の判断や意志決定の唯一の権限を認め、その個人の認識が保障・尊重され、社会の存続と発展の原動力の単位(in+divideなもの)として相互に承認された存在として想定されている。このpublicとしての「近代的個人」なくして近代社会は不可能であり、社会の目的がその近代的個人をいかに定立するかによって、社会の構造が規定される重要な要素でもある。近代の市民革命を支えた思想的過程とは、この脈絡を辿っており、市民的な個人主義的思想が発展・拡大し、個々人の「平等」や「自由」が主張され、あるいはその近代の目標が明確に意識されてきた過程である。すなわち、その能力の如何にかかわらず、いかなる個々人もかけがえのない存在であることが社会的に認知され、社会階層をこえた「生まれながら」の権利という概念を社会的に獲得・確立し、実態化してきた過程であると言いうる。

しかし一方で、近代社会は旧来の生活構造を解体することによって、共同社会や家族を含む人間関係を解体した。封建的ではあっても、あるいは個人の能力を平等に評価しない社会であっても、共同体的生活環境および人間関係は、住人なら誰もが享受する共同的な自然資産や土地、相互扶助という社会的福利を再生産した社会でもあった。たとえばイギリスでは、一般に「中世の村は…耕し、植え、育て、収穫するという一年の農作業のあらゆる場面で村人の一致協力が不可欠だった。領主が、村の自治に反対することはまずあり得なかった。』<sup>5</sup>領主の関心は納めされる税金や収入にあったからであり、中央の司法制度は未成熟であり、地方にまで及ばなかったから、各種問題は領主の「裁判権」に委ねられて、重大な犯罪でないかぎり、一般に穏便に処理されていた。「田舎の平凡な男女は、自分の財産の損失しか考えず、この世の一切の財産がかかっている、ある人間を訴追して死に追いやるようなことはしたがるな」<sup>6</sup>だったし、「犯罪が起こった場合でさえ、非公式の調停に頼って隣人関係の内部でことを満足いくように解決するほうがずっと好まれた。』<sup>6</sup>つまり、ゲマインシャフト的な「村落共同体の構成員の見方からすれば、隣人関係を回復するという意味での秩序維持は…、厳格な法の執行よりも、むしろ訴追の回避によっていっそううまく行われた」<sup>7</sup>のである。しかし、近代化の過程で、地代や、利潤や、賃金で生活するものとして社会階層的に分断されていく個々人は、万人が彼を主体とする「商人」にならなければならなかった。そのゲゼルシャフト的社会

においては、「各人はすべて自己自身の利益を追求し、他人の利益は、それが自己自身の利益を促進しうるものであるかぎりにおいて肯定される。」<sup>8</sup>それは潜在的な絶えざる競争関係（普遍競争）に諸個人を投げ込む。

近代的な個人は、宗教改革の歴史的経験を通して、あるいは科学的認識によって強化される自己確信のために独立性や自律性を獲得していくが、同時にそのことによって社会と対立し、内面的に孤立していかざるを得ない。社会と対立することによって意識され、かつ獲得される近代的自由—それは彼自身の意のままに自律的に何かを決定することができる権利であり、privateな個人的自由と、publicな政治的・社会的自由を含む—は、同時に彼の内面化された孤独を代償としてのみ可能である。彼の内面を理解するのは、世界で彼をおいてほかに誰もいない。ホッブス以降、デカルトやアダム・スミス、あるいはベンサムを含め、近代の哲学者によって、繰り返し議論された人間の情念や感情にかかわる「心理学」は、近代社会における個人を理解するために、重要な研究の対象とならざるをえなかった。自己心理の探求と保全によって内的に孤立していく個人は、互いに敵対しあう競争関係の社会的諸個人に、そのままでは内面的に結びつくことはできない。彼が社会と人間的に関係しようとする戦略は—したがって「生まれながら」の人間の固有の社会的本性に対する認識は—社会と敵対しつづけるのではなく、一方で社会に結びつく強力な心理的ベクトルを不可欠のものとして用意する。つまり、自分がそうであるならば、他者もまたそうであるにちがいない、という必須の共同体的共感を、いにしへの記憶のように保存し、かつその共感に裏付けられていくのである。それは生活を共有する自分の周りの人々に対する家族的な共感ではなく、全く面識もなく、第三者的に「平等」とされた競争の個人々々への共感である。近代的個人は、自己確信と自己信頼のために孤立しつつも、「万人に対する万人の闘争」環境には耐えられず、常にその社会に条件付けられた自己としての共感を育む。ルソー(1712-1778)は、1760年代に書いた自伝的あるいは私小説的「告白」の冒頭に次のように書いた。「私はかつて例のなかった、そして今後も模倣するものはないと思う、仕事をくわだてる。自分とおなじ人間仲間に、ひとり人間をその自然のままの真実において見せてやりたい。そして、その人間というのは、わたしである。…私は自分の心を感じている。…私は自分の見た人びとの誰とも同じようには作られてはいない。…私の方がすぐれてはいないにしても、少なくとも別の人間である。…私の下劣さに腹をたて、私のみじめさに顔を赤くするなら、それもいい。彼らのひとりひとりが、…おのれの心を、私と同じ率直さをもって開いてみせるがよろしい。そして『わたしはこの男よりもいい人間だった』といえるものなら、一人でもいってもらいたい」<sup>9</sup>。ここには、ますます社会と対立していくルソーの孤独感と、しかして自己確信と、そして行間には人間の本性を白日のもとに晒して連帯しようとする情感が溢れている。人々は、そこに他者であるルソーの個人的な告白を読んだのではない。孤立する人間が、自分は決して独りではないし、劣ってもいないことを、他者の心に訴えることによって確認しようと藻掻く文章に、読者は自分の心の声を聞き、個的経験として社会に向かって封印した自己史における良心の呵責や悔恨を思い出して泣いたのである。ミシュレは指摘する。「その『告白』と『(孤独な散歩者の)夢想』によって、つまりその弱さによって、ルソーは勝ったのだ。」<sup>10</sup>

社会的共感には歴史性を帯びている。中世期の処刑や監獄の状況は悲惨を極めた。しかしどのような重罪犯であっても、現代の市民社会では、串刺しや車裂き、生き埋め、釜ゆで、火あぶり、あるいはさらし首というおぞましい刑罰がもはや科されることはなく、かつては一般

大衆に公開され、人々が群がった身体刑そのものも、ごく一部の特殊な社会を除き、公衆の眼前から消えた。かつて支配者は、支配の原理を恐怖として植え付けるために、それらを公開した。しかし今日の私たちが、ギロチンや八つ裂きなど、健全であるべき身体への凄惨な刑罰を目撃するならば、人間的共感から、ほとんど耐えることは難しいであろう。いや、中世期の公開処刑においてさえ、執行人が決められた方法を逸脱し、処刑される人が同情をさそう罪での処刑であった場合など、身体への不遜で、侮蔑的な扱いをしたときなどは、支配者の代理人としての死刑執行人は、公衆から石のつぶてで非難され、ある場合にはなぶり殺されたりしたのである。フランス革命の発端であったバスチーユ監獄の攻略ですら、攻撃する市民がバタバタと命を失っていく中で、無実の市民を殺戮していくスイス人守備隊自体が、良心の呵責に耐えかねて開城したのである。「バスチーユは、みずから身を投げ出したのだ。良心の呵責が、悩ませ、狂乱させ、正気を失わせて」<sup>11</sup>、守備隊が自ら投降したのである。ロシア革命の初動もまた、群衆に向かって発砲する軍隊に憤激したツァーを守備すべき近衛師団（パブロフスキー連隊）の叛乱から開始された。「6時までに、第四中隊は一下士官のもとに無断で兵営を立ち去った。下士官とは誰のことか？彼の名は、幾千幾万の勇敢な名のうちに永久に埋められて知るよしもない。」<sup>12</sup>これらのことは、近代的個性には自己の存在の価値を共感によって保存しようとする性向があることを示し、守備隊の中にも、その近代的個性が成長していたことを示す。人間的共感とは社会とともに進歩する。多くの無権利な人々の、不健康で悲惨な状況における人間存在の尊厳への反省と共感が、公共の福祉（public welfare）や人類共存の原理という公共精神（public-mindedness）を生み出し、それを強力な動力源として、あらたな近代社会の形成に向かわせしめたのである。

### 3. 近代の条件—人権思想—

近代の条件を考える際の重要なキーワードが「個人」と「科学」である。近代の条件としての「個人」の出現は、当然にも個人主義的傾向を背景とする。その個人主義は、宗教的、政治的、経済的、社会的、あるいは認識論的なものを含め、多様な表現をもつ。この近代的個人の出現という観点からは、ルネサンス、宗教改革あるいは科学革命は別次元の歴史的現象ではなく、それぞれがどのように異なる事象に見えようとも分かちがたく関連しており、個別に議論することには限界がある。すなわち、ルネサンスや宗教改革、あるいは科学革命が近代的個人の形成に寄与したというよりも、それらは成長する近代的個人が可能にした異なった側面をもつ歴史的な事象であるという認識の方が正しいだろう。人間はいつの時代も物理的には個人であったが、近代的個人とそれ以前の（古代・中世的）個人には決定的な違いがある。端的に、近代以前には個的人間の代替不能性に基づく人権概念がなかった。したがって近代的個人の重要な要素は「人権」の獲得にあり、社会の近代性は、人権の内容の豊かさとしてそれが社会的に保障される程度に依存し、したがってそれは当然にも、近代的個人の成熟度に依存している。

古代ギリシャにおける個人は、ポリスのためにのみ奉仕した個人ではなかったし、明確に他者を意識し、それと区別された「個人」という志向性を有していたために、むしろその後の

中世のキリスト教的個人と比較しても近代人に近い。それでもギリシャ的個人は近代的個人と決定的に異なっていた。ギリシャ哲学は、有能で卓越した個人の形成を理想とした。優れた個々人は、ブルタルコスの英雄列伝に列挙されるように、あるときは悲劇的ではあっても、ポリスの発展に貢献し、強烈な個性を体現した人たちである。自己のもつ素質を磨き、開花させ、それをポリスに挺身する姿は、古典的個人主義の様を伝える。彼らは、「常に他者を凌駕せよ」とアキレスを諭したペレウスの言葉のように、あらゆる「競争」によって自己を磨き、神に近づこうとする飽くなき向上心を抱き続けた個性の群れである。しかし、近代的個人と決定的に異なるのは、いかなるギリシャ人もそのポリスに関係づけられてのみ、その存在が認められていたし、生存することができたということである。「戦争が起こったときには都市のために全存在を投げうつ義務があり」、「戦場でのここぞというときばかりでなく、いついかなるときでも、個体からはその全存在を捧げることが要求<sup>1)</sup>された。戦功は個人ではなくポリスに属し、芸術作品は私的ではなく公共的に享受され、ポリスから離れれば、その個人の生存は極めて危ういものだった。「ポリスとその利益に相対するとき、個人の生命や所有物はなんの保証もなく<sup>2)</sup>」「ポリスとの断絶はどんな形であれ個人を完全に破滅させる<sup>3)</sup>ものだった。しかしポリスのヘゲモニーは特定の個人や党派によって掌握され、ポリスの名のもとに実施されたから、すべての党派や個人は全力をあげてその覇権を争奪したのである。ここに多様な政治形態が出現し、経験された。今日の私たちが社会を見る視点、視角、観点の多くが個人的視点からのものである。しかしギリシャ時代にあつては、自分の意見を堂々と述べたにもかかわらず、その視点は常にポリスにあつた。シチリア遠征中のアルキビアデスがヘルメス像毀損事件の嫌疑によって母国アテナイから訴追を受け、帰国後の死刑を不可避とみて召喚船から逃走してスパルタに逃れたとき、かれの弁明は、自己の生命の温存ではなく、彼を訴追する悪しきアテナイを作り替えるために逃れるのである。彼は言う。「私の愛国心は私を傷めた所にはあらず、安全に居住できる所にある。私は今や祖国に抗して挑戦しているとは思えず、失われた母国の奪還に赴くのだと考えている。真の愛国者とは、己に不正を働いた母国に刃向かうことを拒絶するものを指すのではなくて、望郷の念から、あらゆる手段を講じて祖国を取り戻そうとする者のことである。」<sup>4)</sup>ギリシャ人の生命は、ポリスによって意義づけられ、そのポリスのもつノモス(慣習)こそが彼のアイデンティティであり、ポリスの抱く宗教、慣習は、市民が遵守すべき律法であつた。したがって、スパルタは言うに及ばず、いかなる偉大な人物も、ポリスによって蹂躪されるのである。その端的な例がアテナイの陶片追放である。有力な個性を追放する制度の逆説は、僭主の出現を過度に警戒したアテナイの民主的絶対政を理解することによってのみ可能である。それは追放したい人間の名前を書くだけで良かったために、常に政争の具になった。ペリクレスでさえ、その危機に立たされた。貧しさを誇りアテナイのために尽力した有能な将軍アリストイデス、徒党を組んでアリストイデスを追放したベルシャ戦争の立役者のテミストクレス、デロス同盟を率いて活躍したキモン(BC510-450)などが、この制度で追放された。戦争遂行時に選ばれる将軍は有力貴族出身であつたが、アテナイはその将軍すらも警戒した。「戦時における指揮は、個人の力を優勢にさせないために、毎年選ばれた十人の将軍に委ねられて(傍点引用者)」<sup>5)</sup>いた<sup>5)</sup>。しかも、国家的な重要な戦争に敗れたり、重大な過失を犯した将軍は罰金を科せられるか、処刑された<sup>6)</sup>。そればかりではなく、それらのポリスに対する科は、ときには家族や末裔にまで及んだのである。

自由な哲学が奨励されたのではないが、ギリシャ文化の底深い発展の根拠は、たしかに自由な言論にともなう思弁の姿勢であった。ヘラクレイトスやディオゲネスなどの哲学者達は、ポリス(国家)から独立しようとした個性であった。しかし、ひとたび自由な哲学が、ポリスの存在の根幹に触れると、それは極めて危険なものとなった。ディオゲネスは、父からの遺産をかってに浪費した廉で告発された。ソクラテスも、ポリスを攪乱するものとしてアリストパネスの筆(「雲」)によって訴追され、結果的に抹殺されたといってもよい。さらにアテナイでは密告を誣告者制度(シュコパンテア)で奨励した。「密告者があると、その密告者を吟味することなく、すべて密告されたものは疑いをかけられて取り上げられ、怪しげな密告者が信頼され、いかに方正な市民も捕らわれ牢につながれた。」<sup>7</sup>それは、何らかの嫌疑があれば、野放しにするより、すべて疑ってかかるというアテナイの考え方に由来する。誣告者はテミストクレスの追放ののち急増したと言われている(ブルクハルト)。密告したものは、密告されたものの財産の半分を取得することができたので、罪状のいかんにかかわらず、富裕市民の財産は誣告者(シュコパンテス)の標的となった。誣告者はその告訴に対してすくなくとも陪審員の五分の一を自分に味方に付けえなかった場合には…千ドラクマを支払わねば<sup>8</sup>ならなかったが、逆に無罪であることを証明することは、密告されたものの責任だった。司法制度も検察制度もなかったために、その評決は市民や党派の意向や策謀や雰囲気によって左右された。かつ無罪の証明は至難であったため、密告されたものは口止め料を支払って訴追を避けるようになった。高齢のアリストテレスでさえ、彼を強請る目的で、洗神の廉による告訴に苦しめられ、カルキスに逃れてマケドニアの保護をうけた<sup>9</sup>。すなわち、ギリシャ・ポリスは個々人の存在をポリスという普遍性に完全に従属させていた。この国家理念は、人間の存在がポリスなしには考えられないという基本的な社会態度に根ざしたものであった。自律しようとする個人がいなかったからではなく、絶えざる戦闘状態の中で、人間の生存はポリスを前提としてのみ可能であり、したがって守るべきはポリスしかなく、守るべき個人という存在は顧慮されなかった。このように、古代ギリシャにおける個々人の生死はポリスに完全に掌握されていたし、奴隷は無論のこと、自由な市民の間にも、人権という思想が育つ余地はなかったし、育ちえなかった。

14世紀以降に顕在化するルネサンス人は、ギリシャ文化のもつ多様な個人的人間性に触発されて、新しい次元を切り拓いた。その背後に存在したものが「個人」であり、それを体現する個人はあらゆる能力を開花させた象徴として「ホモ・ユニバーサル」として認識される。古代の人々も物理的には個人ではあったが、ギリシャ・ポリスの状況が示すようにそれはあくまでも共同体的個人であり、共同体から自立することなど想定することが困難だった。これは中世も基本的に同断である。ギリシャ彫刻は、解剖学的構造を念頭においた動きと均整のとれた肢体を表現し、かつ戦死者の墓に建てられたクローヌス像などは、ポリスの命運に生命を捧げた共同体(ポリス)的理念の発露であり、おしなべて個人的肖像の意味は希薄であり、むしろ「英雄一般」を表現したといってもよい。しかしルネサンスの彫刻や絵画には多くの個人が、その固有の人間の「顔」が、肖像として出現する。ギリシャ人は自然を、彼らの祖先のような神々が代表する「人間的な」存在として、つまり大地や海や太陽を神々に擬して把握していた。あるいは、そのような形でしか自然を認識することができなかった。それは私たちが、人間とは切りはなされ対象化された外界として考えている今日の自然認識とは極めて異なっている。むしろ彼らは正當にも、自然の一部として自らを認識していた。したがって、ホメ

ロスには客観化された自然の描写もなく、ギリシャ芸術は風景絵画を知らない。ヘロドトスの「歴史」にも風景描写はないが、ルネサンスでは、自然の発見あるいはその対象化によって、また人間の「個的感性」の発見によって、自然の描写が加わる。ペトラルカが、自然を鑑賞するためにヴァントウ山に登った—近代的登山といわれる—ことも、近代的個人の現れであった。ペトラルカにとって、登山は、安易な登山道を選択しようとする自分を厳しく戒める内省の道であった。「いかなる物体も下りていくことで高みに到達するなどということはありません。一体何がおまえをとらえてひきとめるのか。あきらかにほかの何ものでもなく、低級な地上的快樂をつうじてのびている道だ。」<sup>10</sup>それは人間が存在の根拠として共生する自然を明確に認識の対象にしたということ、そしてその自然から受ける内的感受性を開発したことを意味する。絵画表現も遠近法の開発によって、目に見える「ありのまま」のリアリティを追求する斬新さをもっていた。近代以前の結婚には、個人的な恋愛や当事者の愛の確認などは不要だった。古代スパルタにおいては、自分の若妻の顔さえ日中には見ることはできなかった。略奪婚や政略婚、その他の政治的、経済的、社会的あるいは生物学的必要性に基づいて人々は結婚し、あるいは結婚させられ、ある場合には私生児を産んだ。社会は、非嫡出の子供達を受入れ、社会的な慣習の内にそれらを許容し、エラスムスやレオナルドなどを育てたのである。近代にいたって、「ロミオとジュリエット」が登場する。恋情を分かち合い、人間的家族的結合の重要な要素とする近代的個人を介して、あらたな家族を形成する。ここに、子どもが新たに発見される素地が生まれる。

ルネサンス以降、西欧社会は近代的個人を育て、自律していく個人は共同体的社会を捨てることをいとわない。「私のふるさととは世界である」といったダンテのように、流浪してもなお充溢する個人が出現する。経済的利得に動機づけられたコロンブス以下多くの近代的個人は、海をこえて世界征服に乗り出していく。これらの歴史的変動の背後に一貫してながれる動き、すなわち人間の生きる理念や態度としての多様な個人主義傾向の成長と発展が、近代の本流である。ルネサンス、宗教改革、大航海時代、あるいは科学革命などは、その多様な歴史的表現形であると見なすことができる。経済的・排他的利己主義は、古代社会であろうが、近代の資本主義社会であろうが、あるいは社会主義社会であろうが、いつの時代でも存在した。マグナカルタ(1215年)や権利の誓願(1628年)は、特定の社会階層の人々の安全性や権利をもとめる前近代的な権利擁護の表現であった。しかし近代の条件として必須のものは、あらゆるpublicな近代的個人が、この世に平穩に、安全に、健全に生きるという、生命の保持・保存・尊重という基本的な「人権」思想であり、その他の一切の人権は、ここから派生する。つまり近代的個人とは、生命の尊重という基本的な人権に裏付けられたpublic(公衆)であり、したがってpublic healthが近代社会思想の源流であることは容易に理解される。以後、人権思想は、これを源泉として、奴隷解放や婦人解放の思想に拡大しながら、public概念とともに発展する。そして現在もなお、人権思想は発展途上である。

#### 4. 宗教改革における個人—良心への服従と自己確信—

宗教改革における教義上の論理的脈絡は、近代的個人や市民社会の成立にかかわる限りに

において今日の意味をもつ。ルター(1483-1546)が、神は全能であり、神のみが自由意志をもち、神と人間との間の仲介は一切が無効だといひ、「万人は万人の司祭である」と確信したとしても、彼はカトリシズムの教義を根底から批判する神学的ないし宗教哲学的な根拠を展開したわけではない。「キリスト者は信仰だけで充分であり、義とされるのにいかなる行いも要しない…。かくて彼がいかなる行いもはや必要としなければ、たしかに彼はすべての誠めと律法から解き放たれているし、…自由なのである。これがキリスト者の自由であり『信仰のみ』なのである。」<sup>1</sup>彼は個的人間の信仰の重要性を説いたのであり、言い換えれば信仰の根拠を自己確信に収斂させた。そのことで一切の仲介を不要とする「個的人間」を定立した。しかし「万人が司祭である」という認識はすでに、ウィクリフ(1320?-1384)によって言明されていた。教義上の論理は、どの論理が正しいかを証明する何らの客観的基準はなく、公会議で決定された多くの「正統の」論理は恣意的なものである。人々は社会の錯綜した経済的利害関係の中で生活しており、その社会的利害関係を体現しながら、生存に必要な限りにおいて、信仰を維持したであろうし、それを表現したかどうかは別として、あるときは新教を信じ、あるいは旧教に止まっただろう。ただ16世紀においては、ルターを含めた宗教改革派ばかりでなく、ロヨラたちの反宗教改革を含めて、それまでのカトリシズムには期待できない近代的個人に相応しい新たな信仰—あるいは道徳律—への「渴望」があったことは確かであり、これらの流れは、近代的個人の広範な成長を根拠づけるものである。イギリスをローマ教皇支配から独立させたヘンリー8世(1491-1547)が発した首長令(1534年)も、政治的に遂行された宗教改革といえるが、しかしそのことで人々が信仰を一夜にして変えたとは考えにくい。ヘンリー8世は、毎年実施されていた教皇からの献金要請を拒絶する理由として、かつてエドワード3世が献金拒否の神学的理由付けとしてウィクリフに編み出させた神学的理論(万人司祭、予定説、自由意志の否定、私有財産廃止)を指導理念として利用し、そして実践した。富は罪悪である。教会は租税とりたての権利を有しない、という国家的要請に応えたウィクリフによって、十分の一税として西欧社会から金銭を搾取しつづけていたカトリック教会の財産没収でさえ、理論的に正当化されていた。「ウィクリフによれば、キリスト教会とは教皇のことでなく、…全キリスト教徒の共同体なのである。…信徒は主と直接の関係を結んでおり、それゆえ自分自身が司祭なのである。」<sup>2</sup>神はすでに誰を救済すべきかを知っており、「祈りや善行によってその運命を逃れようとしても無駄である。善行は神の恩寵を得るための手段ではなく、神の恩寵のひとつのあらわれにすぎない。…善行は道具的価値は持たぬ。」<sup>3</sup>ルターやカルヴァンの思想を先取りし、しかも「真のキリストの世界では、私有財産は廃止されるべきである」という共産主義的な思想は、のちのレヴェラースさえ先取りしていた。その大胆な思想がローマから断罪されなかった事の方が不思議である。

宗教改革には強烈な個人主義のベクトルが存在した。ウィクリフからカルヴァン(1509-1564)に至るまで、彼らは常に聖書に言及し、聖書に依拠することを権威の根拠としてきたが、しかし客観的には、聖書が根拠だったのではない。聖書を解釈した個々人の理性が根拠だったのである。しかしながら改革者達は、聖書の権威に依拠する以外に方法はなかった。聖書が権威であることを誰も反駁できなかったからである。聖書には種々の矛盾した表現がちりばめられており、多様な解釈が可能であり、したがって聖書を読解する個人的解釈こそが「宗教改革」の土台になったのは自然の成り行きである。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない」<sup>4</sup>と宣言するルターの思想史的意義は、それが

カトリックの腐敗を糾弾したという以上に、あるいは神との直接的な関係を希求したという以上に、宗教的独善とすら考えられるような場合でさえ、彼らはそれを主張し、結果として、人間の宗教的認識や信条の個的確信とその独立性を決定づけたという点である。それは確かに、カトリックの教義や行動を批判し、人間認識の正当性を主張することによって達成された。ルターもカルヴァンも、その宗教的根柢として、「人は信仰のみによって義とされる」という表現で、宗教上の、あるいは教義上の論理を展開したが、彼らの教理や信条の論理的な正当性が重要であったとは思われない。それはルターの農民戦争(1524-25)への態度(農民の殺戮を容認)やカルヴァンのジュネーブにおける強権的な神政政治(政敵の追放や処刑)をみれば明らかである。カトリックとプロテスタントの批判しあう二つの主張——一方は宗教的・精神的に組織化され、歴史的経過の過程で蓄積された社会的経済的特権をそのまま維持しようとする態度であり、一方は、あらたな理念を背景に精神的(宗教的)権威の桎梏を破壊しようとする主張——が、議論で決着することなど、ほとんど期待できなかった。むしろ、「なんら精神生活を伴わないくせに、精神的要求を掲げることに対する憎しみ」<sup>5)</sup>が、領邦主や没落騎士や農民を含めた多くの「支持者」を見出したという歴史的過程こそ重要である。ルター派はローマ・カトリックとの対立の構図で、世俗権力の立場を強化した。ドイツ領邦主にあつては、かつて叙任権闘争などで奪われ、教会権力が保持していた多様な世俗的経済的特権を取り返すという動機も大きく影響した筈である。ルターが95箇条の提題を貼り付けたウィッテンベルグ城の選帝侯ザクセンは、免罪符で領内の金銭がローマに奪われることを嫌って、免罪符販売人であるドミニコ会士テツエルを領内に入れなかったし、テツエルとはといえば、教皇レオ10世の政治的目的(教皇領地の拡大)のために使用した莫大な費用を回収するために免罪符を売り歩いたのである。

ルターの提題の論争内容は穏健で殆ど問題になるものではなく、通常に行われていた手続きに則ったものだった。問題だったのは、批判に曝され弁明の機会ごとに過激になっていったルターが、教皇も教会も過ちを犯すことがあると言明し、一方で「教会がこの批判者を沈黙させようとしたことである」<sup>6)</sup>神聖ローマ皇帝カール5世が宗教的和解のために招集したウォルムスの会議(1521年)に招聘されたルターは、いきなり自分の書いたものを取り消すことを要求されて一瞬たじろぎ、一日の猶予を申し出たあとで、翌日彼は敢然とそれを拒否し、自己の考えの正当性そのものよりは、考えが変更不能であることを主張したと伝えられている。「ここに私は立っている。私にはほかにもどうすることもできないのだ。(傍点引用者)」<sup>7)</sup>この言葉の意味は、個人的思想・信条は、個人的な動機付けによる必然性をもっており、他者によっては変更不能である、と理解される。この会議の結果として公権を剥奪され、宗教的にも異端とされたルターは、ザクセンへの帰途、忽然と姿を消した。コンスタンツの公会議に「招待」されながら、捕縛され焚殺(1415年)されたヤン・フスの記憶が人々にあったため、ドイツは混乱した。全ヨーロッパを巻き込む宗教改革は、現実としてはむしろこのときから始まったといえる。しかしルターは、ヴァルトブルグ城にかくまわれ、聖書のドイツ語訳に専念し、1522年初版本が、また完全な翻訳本が1534年—イギリスがローマ・カトリックの権威から脱退した年(首長令)であり、またロヨラが6人の弟子とともに軍隊の誓いを立て、「反宗教改革」と呼ばれる国際的伝道活動を開始した年—に出版される。無数の個人的解釈を可能する翻訳された聖書は、しかしルター自身にとっても爆弾だった。なぜならば、聖書を手にした人間それぞれの独立した個人的解釈によって、多くの「キリスト教」派閥が存在する宿命



にあったからである。エルトンは書いている。「もしも宗教改革史を貫く一条の金線があるとすれば、それは聖書が庶民の手に握られたことである。もはや歴とした知識階級がこれを解釈するのではなく、あらゆる階層の人びとが、その信仰と幻想、常識と非常識、それらを織りまぜながらこれを解釈する。そのときこそ聖書は、その破壊的な、革新的な、またあらゆるものを解体してやまぬ影響力を発揮することができるであろう。」<sup>8</sup> 自国語による聖書の翻訳が、以後ヨーロッパの各国で陸続として行われた。このことは同時に、個々人の社会的階層や職業が何であろうと、読み書きできる人々の存在を前提とする。そしてまさにそのことが、中世を解体した「近代的個人」の成長の重要な背景でもあった。したがって宗教改革を支えていたのは、宗教的解釈にあらわれる自己の良心への絶対的服従、すなわち個人の自律性へのベクトルであり、それが宗教改革を越える重要な近代史を貫く源流となっていく。一方で、カトリシズムからの解放のエネルギーは、宗教内部の改革を遙かに超えて、農民戦争指導者のミュンツァー(1489-1525)や再洗礼派など、多様な共産主義的急進主義を産みだした。しかしながら、歴史のかつ社会的諸条件は、小集団の覇権を一時的に許容しはしたが、決して永続させることはなかった。彼らはことごとく鎮圧され、あるいは圧殺された。一方でローマ・カトリックは、1540年教勅「レギミエ・ミリタンティッス・エクレシア」によってイエズス会を公認し、1542年に宗教裁判所を設置してプロテスタントに対する戦闘態勢を整える。「イタリアは精神的沈滞に陥った。かの『ローマの掠奪(1527年)』よりも宗教裁判こそが、イタリア・ルネサンスの幕を下ろしたのである。」<sup>9</sup> フランスをはじめ、ドイツにおいても、プロテスタントに浸食された宗教地図は、イエズス会の近代的で高度な教育制度のもとに、再びかなりの部分が塗り替えられた。このことは、新教のみが近代を準備したのではないことを教えている。なぜならば、農民や商人の子弟にまで、平等にかつ無償で提供されたイエズス会の斬新で意欲的な教育、すなわち科学的・数学的素養を重視した内容は、デカルトのような多くの若者の知能を鍛錬・育成したからである<sup>10</sup>。

## 5. 科学革命における個人—宗教との相剋と共闘—

ルターやカルヴァンの宗教改革のような社会的華々しさはなかったが、この時期、別の革命が静かに進行していた。社会から独立し、自己の内なる言葉を聞くという鮮烈な経験をもつ「個人」の出現とともに、その個人を世界認識のレベルで内的に支える「科学」は、近・現代社会を理解するうえでも重要なキーワードである。近代史は「近代的個人」の成立史であるとともに、「科学」の成立史としても捉えることができる。バターフィールドは書いている。「西洋文明史の中で、諸科学が果たしてきた役割を思うと、科学史のもつべき重要性を疑うことはできない。…通常の教育目的から見て、人文科学の学生にも、自然科学の学生に対しても極めて重要だと思われる分野は、…『科学革命』である。…この革命は、…スコラ哲学を葬り去ったばかりか、アリストテレスの自然学をも壊滅させたのである。したがって、それはキリスト教の出現以来他に例を見ない目覚ましい出来事なのであって、これに比べれば、あのルネサンスや宗教改革も、中世キリスト教世界における挿話的な事件、内輪の交代劇に過ぎなくなってしまうのである。」<sup>11</sup> にもかかわらず、歴史の教科書のなかでの科学革命は、ルネサンス

や宗教改革の記述に比べれば挿話的でしかない。無論科学革命が、ルネサンスや宗教改革と無縁のものであるのではない。むしろ科学革命は、ルネサンスや宗教改革を抜きにしては語ることはできない。すなわち、宗教改革が、宗教的解釈の個々の自律性の確立過程であったのに対し、科学革命は、その自律した個人による自然の再発見(対象化)、すなわち科学的知見の集積による科学的認識論の成長と確立の過程である。それが様々な分野に相互に影響し合いながら組織化され近代社会を形成したのである。

「信仰」や「教義」の正当性あるいは誤謬を判断する基準は、判断者がどのような認識や信仰を持つかに依存する。神の証明ができないかぎり、神がどう判断するかということが人間に判る筈がない。しかし、信仰を堅持した人々にとって認識の正当性を決定づける根拠は、神の行為の理解、すなわち神の所産としての現世の意味を、自然における法則の中に見ることだった。自然の法則は神の法則の具現化されたものに違いなかった。世界はどのように計画され、創造され、機能しているか、その知的欲求が求めるものは、認識の現実との整合性であり、逆にいえば、現実の説明可能性としての認識である。人間の生存環境を説明することは、古代ギリシャ時代から変わらない人間存在のアイデンティティにかかわる欲求であったが、これがプロテスタント的色彩を帯びたとき、自然科学的研究は、信仰への重要な心理的効果を帯びるものとなっていた。「ピューリタン、洗礼派、敬虔派の信徒達が特愛した学科は物理学であり、それに次いで、おなじ方法でもって行われる諸他の数学的=自然科学的諸学科だった。つまり、現世の意味は、神の啓示の断片的な性格のために…概念的施策によってはどうしても捉ええないけれども、自然における神の法則経験的把握によってその知識まで到達しうる、と彼らは信じたのだった。17世紀の経験論は禁欲思想にとって、『自然における神』を探求するために手段だった。』<sup>2</sup>

当時のヨーロッパ人の世界観に着実に変化が起こっていたことは、ディアスの喜望峰への到達(1488年)や、ジパングに魅せられたコロンブスがアメリカに達していたことで部分的に示される(1492年)。そのことはすでに、磁気コンパスの発明や航海術の進歩を裏付けている。そしてアメリカ大陸やヨーロッパからは遠隔地の新たな情報が多様な形で、固定的だったヨーロッパ社会を揺さぶった。この時代の航海者とは、海賊であり侵略者だった。一攫千金の富と植民地を求めて、ヨーロッパ人が私財を投げ打って船出していったその後の大航海時代は、それでも新たな「世界」を現実化させた。ルター以降の「宗教改革」や、それに対してカトリシズムを覚醒させた「反宗教改革」の激しい布教活動の背後で、しかし宗教の次元を遙かに超えて、人々の世界観を変えたのが「科学革命」である。科学革命は現在もなお進行形であるという意味でも、その年代はほとんど特定できない。それは連続的、継続的に、相互に関連しあいながら、しかして決定的に、人々の認識の方法に起こった決定的な変化であったからである。しかしそのエポックの一つを上げるとすれば、コペルニクスが死亡した1543年であろう。この年は、大小二つの宇宙=天体と身体一の構造を変える著作、すなわち「天体の回転について」とヴェサリウスの「解剖学」が出版され、さらにアルキメデスの著作が翻訳された年でもある。

科学革命の重要な意義は、合理的精神による自然の対象化であり、それを可能にするものごとの思考方法の転換であり、いわゆるパラダイムの変更である。宇宙の原点を地球から太陽に変更すること(太陽中心説)、静止する物体を等速運動とみること(慣性の法則)、あるいは人間を一連の動物進化の所産と考えること(進化論)など、歴史的なパラダイム変更が

現代の私たちを概念的に支えている。パラダイムの転換とは、「従来と同じデータを用いながら、しかもそれらに別の枠組みを当てはめて相互の関係を新しい体系に組み替えることである。」<sup>3</sup>パラダイムの変更は、同じ設問に新しい解答を準備するが、この変貌は天才的な一人の人間によってもたらされるものではない。多くの類似した人間の努力が、パラダイム変更を可能にする一人の頭脳を支えている。ニュートンが敬虔なキリスト教徒であったように、多くの天才的な人々も、なお「時代の子」であった。パラダイムの変更は結果であり、重要なのはどのようにしてそれが可能になったかという原因である。その変化は、人間の自然認識の具体的な方法が、数学を不可欠なものとして確立されつつあったことにある。

現在のポーランドの一地方トルンで産まれたコペルニクス(1473-1543)は、ポローニャ大学で教会法(ローマ・カトリック教会とその組織についての法体系)や天文学を学び、パドヴァ大学で医学を学び、そしてフェッラーラ大学で教会法の博士号を取得した。その後コペルニクスは、ワーミア(東プロシヤ)で医師となり、ドイツの多くの貴顕な人々の主治医でもあったし、封建時代の次男以降の家督のない指定の俸禄として準備されていた聖堂参事会員であり、同時に明確なルネサンス人でもあった。彼は天文学の専門家ではなかったが、復活祭の日時を決定する作業上でプトレマイオスを辿りながら、天体の新たな「説明可能性」を見出した。1514年の宗教会議で暦が議題になった際に意見を求められたが、それに答ええることはなかったし、幾何学的理論を体系的に公にすることもなかった。もしコペルニクスに体系的理論の出版を強力に勧めたレティクス(1514-1574)が現れなかったら、「天体の回転について」は世の中に存在していないだろう。1539年、コペルニクスの元に訪れたウィッテンブルグ大学の若き数学教授でプロテスタントのレティクスは、コペルニクスと2年間を共に生活し、コペルニクスの許可を得て1540年匿名で「第一考察」という小冊子を出版し、コペルニクスの天文学をヨーロッパに紹介した。レティクスはコペルニクスの論理の全体像を出版することを奨め、「回転論」の完成を待ち、出版するべく原稿を持参してウィッテンブルグに戻った。これが1541年の秋である。翌1542年、コペルニクスは脳卒中に倒れ、レティクスは友人の神学者オジアンダー(1498-1552)に出版を託し、書物が完成したのは翌1543年である。その本は、しかしカトリックの訴追を免れるためか、「単なる仮説である」というオジアンダーの弁解的な序文を載せて出版された。この序文にレティクスは憤慨した。彼によって、序文の部分に×印がつけられた書物が残されている<sup>4</sup>。コペルニクスの理論は、実証的に確認されたものではなく、たしかに「仮説」に違いなかった。事実「コペルニクスの転回」というパラダイム変更を現実のものとしたのは、火星軌道の7分の誤差を許容したコペルニクス自身ではなく、2分の誤差を許容できなかったケプラー(1571-1630)によってなのである。しかしすくなくともコペルニクスにとって、あるいはレティクスにとって、数学的に立証されるものは、真実でなければならなかった。人間もなお生存していくためには、自然界を合理的に解釈し、それに反応する演算処理機能を必要とし、それが中枢神経の存在理由に他ならない。数学(このときは幾何学)は、現在するが故に合理的である自然の、しかも定量的な解析言語であり、数学的合理性は自然のメカニズムの証明であるばかりでなく、それは、数学的な思考が自然を表現し、あるいは理解する上で必須であり、むしろ数学的にしか表現できない事柄があることを意識していたからに違いない。かつて世界が数で構成されていると考えたピタゴラス(派)が近代に蘇っていた。現実との整合性ないし認識方法という観点においては、イタリア・ルネサンスの芸術家たちにとっても事情は全く同様であった。

人文主義者でもあり建築家でもあった「アルベルティ(1404-1472)からレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)にいたるまで、彼らはたえず数学の重要性を唱え、数学は芸術家になるための必要条件だとさえ主張したのである。」<sup>5</sup>数学という言葉で記録された自然という概念は、現実的な説得力をもっていた。まだ概念として認識されていなかったにもかかわらず、「重力」に抵抗する建築物が、倒壊に至らないよう合理的に設計・建立されなければならないことは彼らの常識であったと思われる。復活節の日時という将来への予測を可能し、天体の構造と動きという自然の摂理を統一的に、緻密に説明する「合理性の衝撃」が、当初ローマ教会には理解できなかったし、出版の許可は与えられていた。コペルニクスの元に届けられたその書物をコペルニクスが見たかどうかは定かではない。同年5月24日、コペルニクスは70歳で他界した。コペルニクスの「回転」が禁書になったのは、彼の死からおおよそ70年後以上もたった1616年であり、ガリレオ裁判の渦中である。したがって、コペルニクスの考えは、広く普及したと考えられる。

宗教改革の第二世代ともいべき「カルヴァン(1509-1564)の神学は、ルターの感情的な救済神学やバロック時代のカトリシズムのもっていた人間的虚飾とくらべ、はるかに17・8世紀科学が描いていた機械論的宇宙像に近いものであった。カルヴァンの神である創造主は、ニュートンのいう最初の原動者とか、合理主義者のいう第一原因に似たものをもっている。」<sup>6</sup>そこには、人間の喜怒哀楽を超越した神の原理があり、人間にはその神を認識することができないために、カルヴァンは信仰の必要性を説き、その信仰が救済の概念と密接に関連していた。「神学的思考から、また救済という人間的な問題から、宇宙という超越的な問題に方向転換したこと、これこそ宗教改革期神学に対してカルヴァンの果たした大きな貢献であった。」<sup>7</sup>カルヴィニズムが、フランス・ユグノーやオランダ独立派、スコットランドの長老派、あるいはマサチューセッツ(アメリカ)などで、ルターの教義よりも広範に支持された理由は、神と世界認識を融合させた了解性や説得性にあったと思われる。つまり、カルヴァンの教義そのものというよりも、カルヴィニズムを支持した人々の認識に、カルヴァンの教義が適合していたという点が重要であった。カルヴァンの予定説は、神が誰を選んだかを全く窺い知ることはできず、いかなる現世の活動によっても予定は変更されない、と説いたにもかかわらず、信者は自分こそは選ばれていると確信していた。逆にいえば、選ばれたものであるかどうかを知る手段はなく、それを信じるしかなかった。この点で、変更不能の予定説は、「希望の哲学」に変貌していたのであり、彼らは個的に、しかし明瞭に意識される良心に服従し、その自己確信によって戦闘的になり得たのである。カルヴィニストは、神の摂理を、キリストという人格神的な認識を超え、この無限の自然を準備し、一定の摂理で現象させている未知なる力として理解し始めていた。それは、クザーヌス(1401-1460)やコペルニクス(1473-1543)、ジョルダンノ・ブルーノ(1548-1600)、あるいはヤコブ・ベーメ(1575-1624)やスピノザ(1632-1677)にも連なりうる自然の理解であった。その個々の主張を全面的に支持することなかったとしても、世界と自然の合理的解釈とその了解可能性および説得性は、確実に同時代人に広がっていたと考えるべきである。

プロテスタントは、ローマ・カトリシズムの批判の根拠として聖書に依拠したが、重要なことは、個々人による魂の支配や信仰の選択を重要視し、それによって自己への信頼性を高め、人生の多様な岐路における自己決断を正当化したことである。信仰としての神との交わりは深い内面的孤立化の中で行われた。自己確信は、耐えざる自己審査に基づく内面的緊張

の渦中からしかでてこない。厳格な聖徒達は、不断の反省によって「個」を獲得する一方で孤立し、故に他方では、彼らの連帯のためには組織的な戦闘的教団と「隣人愛」を必要とし、自己の「救済」の確証を社会的活動の中に求めたのである。救済の「確証」を自ら生産するという「自己完結性」の中に置いたとき、彼らは、社会的な権威や抑圧の体系から内部的に解放されたと考えることができる。孤立した聖書の解釈は、不断の分派の形成を促したが、自らの力で考え、己の内なる声を聞くという鮮烈な体験を通して、カルヴィニズムは明確に「個人主義」への道を開拓した。「真に永続的な個人主義の出現は、世俗的な運動ではなくて宗教的な運動によって、ルネサンスではなくて宗教改革に負っている。」<sup>8</sup>この自己確信と自己決断の正当性が自覚されなければ、プロテスタントにおける「抗議protest」という意識は産まれてこない。ローマ・カトリックへの精神的圧迫を乗り越えるためには、プロテスタントには自己確信が不可欠だった。かつカルヴァンの教義は、人間的救済という個的完結性よりも、社会的正義という概念に貫かれていた。自己確信と正義が融合すれば、それは「墮落した」社会への反乱への大義を構成する。すなわち、カルヴィニストは、世俗政権への服従よりはるかに、かれらの生を意義づける良心への服従を優先させたのである。したがって、カトリシズムの集合主義的な統一性、すなわち信仰における教皇・枢機卿あるいは聖職者という社会的ヒエラルヒーも考慮しなかった。カルヴァン主義は強力な教会組織を構築したが、理念としては、あらゆる個人は神の前に「平等」であった。この思考の地平から神という信仰の枠組みを取り去っても、「平等」の概念は生き続けるであろう。やがてデカルトによって個的認識の絶対的自律性が哲学的に定立され、スピノザによって人格的な「神」が汎神論から自然の原理そのものに昇華するとき、宗教改革と科学革命が期せずして共闘し、近代的な自己確信と認識論が準備され、科学的理性に唯一の権威を認める近代的個人における重要な要素が形成されていく。この文脈から、カルヴァン主義の歴史的意義と近代への布石は、科学革命とともに、誠に大きかったと言わなければならない。

一方医学界でも、1543年、画期的な重要な書物が出版され、大きな地殻変動がおきていた。アンドレアス・ヴェサリウス(1514-1564)の手になる「人体の構造(ファブリカ)」である。12世紀以降、アラビア医学のイタリア南部への移入によって、サレルノ医学校が発展し、その後パドヴァ大学や南フランスのモンペリエ大学で、医学は発展した。しかしほぼ1千年に亘って、解剖学の絶対的な権威でありつづけていたのは、動物の解剖に依拠したギリシャ時代のガレノス(129-200?)の医学であったし、誰もがそれを変更の余地のない事実であると受け取っていた。ヨーロッパ中世を通して、アリストテレスの合目的論的な生物学を基礎としたガレノスの医学理論は、創造主である神の目的性に組み込まれ、キリスト教と一体化され、絶対的な権威で受け取られていた。しかしそれが人間以外の動物の解剖学的所見に依拠したものであったため、人体とは多くの違いがあったのである。しかし驚くべきことに、1,000年におよぶ長い期間に、だれもそのことに疑問を持ったり、反駁するひとがいなかった。その大きな理由の一つは、アレキサンドリアを中心に栄えた開明的なヘレニズム文化がキリスト教の浸透と国教化によって圧迫され、衰退したのち、解剖という人体へのアプローチが神への冒瀆と考えられ、禁止されたことによるだろう。事実ヘレニズム文化最盛期のアレキサンドリアでは、エラシストラトス(BC.300頃)等によって死体の解剖が行われていた。ヨーロッパではようやく1482年、教皇シクストゥース4世(在位1471-1484)は、「死骸が処刑された罪人のものであり最後にはキリスト教徒らしく埋葬されたのであれば」という但し書きをつけて、腑分

けをすることに依存はないと述べ<sup>9</sup>、人体解剖が行われるようになった。

アンドレアス・ヴェサリウス(1514-1564)は、ブリュッセルで生まれ、保守的な神学部のあったルーヴァン大学に入学したあと、パリ大学で医学を学び、パドヴァ大学に留学した。パドヴァ大学は、市民との紛争によってボローニャ大学の学生が移動して成立した大学(1220年頃)であるが、16世紀には最も卓越した医学校になっていた。解剖学を学び始めたヴェサリウスにすぐに判ったことは、医師の多くが解剖学を知らないということだった。「解剖が推測を検証するのに使えるかもしれないという可能性を、私は注意深く考察した。」<sup>10</sup>「…人体解剖を誰かにやらせ、身体の部分の説明はまた別のものにやらせるという、嫌悪すべき習慣。後者はまるで、カラスのように高椅子にふんぞり返り、とんでもなく横柄に、自分が実際調べたこともないのに、多くの学者の本から丸暗記したり、目のまえで読んだりして、ぶつぶつという…」<sup>11</sup>このころの解剖学実習は、医師は手を下さず、医師の指示で解剖の知識のない「床屋達」が、医師の指示に従って実際の解剖を行った。床屋達は「古典語を知らないために、自分のした解剖を観衆に説明できず、医師の指示にしたがってあるべきものを台無しにする。医師の方は自分の手で解剖をしたことがないので、解剖手順書にしたがって、横柄に部下を支配する。このように学校での教え方はまったく不適切で、愚かな質問で月日が無駄に費やされる。」<sup>12</sup>1539年以降、ヴェサリウスは解剖する機会が増えるにつれて、幾度も検証しながら、ガレノスの解剖書に謬りがあることを確信するようになった。それは彼にとって、正真正銘の人体の解剖に基づく解剖書を編纂させる動機にもなったが、同時に、世界に君臨してきた学術的権威に異を唱えることでもあった。したがって、彼の仕事は敵対的な批判を覚悟しなければならない状況を生み出したが、「ヴェサリウスがガレノスを批判したのは、事実に関することだけであり、あくまでも特定の解剖所見とガレノスの原典との比較に基づいて批判しているということである。彼は、この古代の医師を高く評価していたので、批判することを喜ぶとか自慢するようなことは決してなかった。」<sup>13</sup>ヴェサリウスは、宗教的には保守的なカトリック信者であったが、彼の実証的な仕事は、人体に直接学ぶというヒポクラテスの原則に回帰していたことによって、明確にルネサンスの線上にあったといえてよい。ヴェサリウスは医学の学士の学位をとった直後に、異例の外科学の教授に任命されたが、その後スペインに戻り、フィリップ2世(スペイン)の宮廷侍医となった。

信仰は確信されるが、確証されることはない。一方、科学的発見や実証は、それをなした人の信仰や政治姿勢とは無関係に確証されていく。「ケプラー級の天才的学者までもが、魔術を否定する訳にはいかないと主張した。」<sup>14</sup>しかし、再現性ある現象はあらゆる人に普遍的であり、その確認によって、やがて人間の理性と心を惹き付け、人間の日常を変え、社会の構造を変える。それは人間の理性が、空想世界を構築するためではなく、この世界に生存していくために、時代の限界を超え、世界を理解し、よりよく適応するための高度な人間の武器であることをあらためて教えている。ヨーロッパ中で出版されたヴェサリウスの解剖学の廉価版は、ヨーロッパ中の医学生を、ガレノスの誤謬から救い、かつ人間はなお研究されなければならないという現実的な認識を育てたと思われる。

ガレノスの権威に挑戦し、かつ当時の医学教育の怠慢に憤慨していたヴェサリウスは、カトリックの牙城スペインの宮廷医師であったが、しかし彼は宗教による政治的立場にあまり顧慮しなかったように思われる。というのは、スペインに残留するイスラム教徒の改宗の障害となっていた「三位一体論」を批判してスペインを追われた医師ミゲル・セルヴェト(1511-

1553)と協同で、パリで人体解剖を行っているからである。セルヴェトは、コーランと聖書を熟読し、「三位一体論は聖者崇拜と同様、巧妙に装った多神教の一形態である」<sup>15</sup>とする「三位一体論の誤謬について」を書いていた。解剖学は現象の記述であるが、その進歩は、当然にも人間の身体の機能について思索を深める契機となっていた。自由な思想家で医師でもあったセルヴェトは、それまで信じられていたガレノスの理論、血液は右心室から微細な孔を通して直接左心室に送られる、という説を否定し、右心房から肺に送られ(肺動脈)、肺で空気に交わる心臓に戻る、という肺循環の機能を世界で初めて明らかにし、卓越した解剖学者であることを証明している。これはハーヴェイの血液循環の発見(1628)に先立つこと75年である。しかし神学にも傾倒したセルヴェトは一方で、「キリスト教の復興」(1553年)を書き、その中で、カルヴァンに意見を求め、その議論の過程でカルヴァンの「キリスト教綱要」を運命予定説を批判した。憤慨したカルヴァンは、訴追を避けるため匿名で出版されていた「キリスト教の復興」(1553)の著者がセルヴェトであることを、自分宛のセルヴェトからの私信がその書物に載っているという証拠を添えて、反宗教改革の牙城であるスペインの宗教裁判所に密告した。セルヴェトは捕らえられたが脱獄に成功し、ナポリへの逃走を計った。しかしその途中、あろうことかジュネーブに立ち寄り、神政政治を敷いていたカルヴァン派(ジュネーブ市)に捕らえられたのである。「ジュネーブの法では、通過旅行者に対する処罰は追放だけであった」<sup>16</sup>が、カルヴァンはその法をセルヴェトには適用させず、「70日間の悲惨を究めた獄中生活と大神学論争の後」<sup>17</sup>処刑(火刑)してしまった(1553年)。そればかりか、セルヴェトの処刑に反対した二人のイタリア亡命知識人を追放し、一人を斬首したのである。思想の違いを死をもって断罪したことをユマニストのセバスタチャン・カステリオン(1515-1563)は批判した。「カルヴァンは自分の信仰は絶対に正しいという。だが、他のものもそう言っているのだ。では誰が彼を全教派の審判者として彼だけに殺す権利を与えようか。…異端を殺し続ければその論理的帰結は絶滅戦争にはかならない。…専制は叛乱を生む。叛乱は異端を生かしておくことから生じるのではなく、彼らを強制し、殺そうとする企てから発生するのだ。」<sup>18</sup>新しい神学も教会も、彼らが批判したカトリシズムと同様に、思想や言論の自由をもたらさなかったが、カルヴィニズムが世界を変える原動力になったことは、宗教改革の皮肉である。焚殺されたセルヴェトが20歳のころ書いた「三位一体論の誤謬について」は、人文主義者によって16世紀のイタリア語に翻訳されて広く流布し、このことは多くの人々がそれを読んでいた可能性を示唆する。

この2年後、1555年に、ヨーロッパの宗教的統一とイスラム勢力からの防衛に人生を費やしたカール5世の努力によって、「国家の宗教が臣民の宗教」というアウグスブルグの和議が成立する。しかしこの和議は、臣下となる人々の宗教的良心を篡奪する妥協の産物だったし、むしろこれ以降、ジュネーブからヨーロッパ各地に送られたカルヴィニストの鉄の規律に基づく社会(宗教)改革に対する戦闘的姿勢は、1559年からのユグノー戦争や1568年のオランダ独立戦争、あるいは30年戦争などを惹起し、ヨーロッパは、政治や経済が絡み合った血で血を洗う「宗教戦争」の時代に入ります。

## 6. 民衆の覚醒と科学者の変貌

科学的発見とその真理性の根拠は、現実世界の説明可能性である以上に、了解可能性であった。地動説であろうと、天動説であろうと、住民の生活そのものが変化する訳ではなく、日々生きる人々にとっては、東から太陽が昇り、西に沈めば天動説であろうと地動説であろうと、どちらでも良いことである。さらにガリレオが観察した木星の衛星も、あるいはケプラーの法則も、現実の世界や生活を変えるものではなかった。世界の変革は、音もなく、人間の意識で始まる。つまり、宗教改革の背後で、静かに進んでいた科学革命は、人間の自然認識に対する個人の役割を決定的にし、個人の中にはるかに清明な力強い、かつ合理的な自然理解のための観察力や開明力が宿っていることを知識人は自覚した。しかし、あらたな世界の科学的理解は、信仰の次元を越え、また当時の知識人によるお墨付きの説明を越えていたために、ケプラーは新旧両キリスト教から非難されたのである。「プロテスタントの天文学者であったケプラーは、チュービンゲンのプロテスタント教授団から迫害をうけて、1596年にイエズス会に逃げ込んだ(傍点引用者)。」<sup>1)</sup>しかし、1572-74年の新星の出現や1577年の彗星の出現は、月下におこるとされていた宇宙の恒星天球の存在への懐疑を高め、ティコ・ブラーエ(1546-1601)は、観測した彗星が、それまで信じられ、確信されてきた月の天球より6倍も上(遠隔)にあることを証明してしまった。これらの自然認識にかかわる変革は、望遠鏡や観測技術という実験的手法の応用・普及によって可能になったものであり、それは実験者の信仰の如何に左右されるものではなかった。実験的検証の方法論の確立は、市井の個々人に、あらたな自然の姿の開明を可能にし、かれらによる創造的発明によって、個人が、自然を合理的に説明する能力をもつことが認識された。もはやカトリシズムに、科学の持続的な発展を押しとどめ、神学的説明に帰依させようとする理論的な力はなかった。したがってその歴史的な権威を維持・保全するための最終的な武器が、異端審問とそれによる処刑だったのである。ローマでは、1542年7月、カラファー(のちのパウルス4世1555-59)によって宗教裁判所が設立され、異端を排除するための態勢を整える。検察制度を含む裁判制度や司法制度、あるいは行政機関が未成熟の時期において、最終的な刑事罰の執行は、地方権力に委ねられ、その上に教会権力があつた。そして刑事罰には罪状に応じた処刑の形態があり、とくに焚刑(火あぶり)は異端者、貨幣偽造<sup>2)</sup>などの「重罪」のための手段であつた。

頭に浮かんでくる思想、それがどのように空想じみた物であつたとして、その思想を自由に述べる誘惑は、人間の本性に関わるものである。今という時間を生きている個体としての人間にとって、右足を挙げるか、左足をあげるかという日常的判断の線上にある大脳の機能である。生きているのは、他のだれでもない自分である。その自分の中枢神経から産みだされる思想は、それが他の人々の思想を色濃く宿していたとしても、彼の思想であり、あらためて誰の思想かを問いはしないだろう。自分の頭の中に浮かんでくるものを、誰も他人のものとする訳にはいかない。頭の中に浮かんでくる自分の思想の一部が受け売りだつたとしても、それを認識し、確証しさえすれば、それは自分の考えである。沈黙することは可能であるとしても、その考えを拒否することなどはできない業である。この人間の有様は、町の粉挽き屋とて、あるいは農民とて、同様であつたらう。

1599年、「教皇庁の命令にもとづいて火炙りの刑に処せられたフリウリ地方(イタリア北東部)の粉挽き屋」<sup>3)</sup>メノッキオは、議論好きの性格で、友人であろうと、司祭であろうと、時



間があれば信仰や宇宙について彼の認識を披瀝するのが好きだった。彼を知る町の人が告発することはなかったが、町に派遣された助祭によって1583年異端の廉で告発された。メノッキオはその裁判の過程で明言する。すべての人間はただの人間であり、「処女である女性からうまれたものはない」<sup>4</sup>、人類の罪を償うためにキリストが死んだのではなく、「もしある人が罪をなしたとしたら、贖罪をおこなわなければならないのは彼自身である。」<sup>5</sup>メノッキオは審問官を説得しようとさえる！「どうかお聞きください、猊下。…神はすべてのものに自分の法に従って生きたいという願いをおあたえになったのですが、そのうちどれがすぐれたものであるかは、わからないのです。キリスト教徒にうまれたからには、キリスト教徒のままに止まりたいと思うけれど、もし私がトルコ人に生まれついたなら、トルコ人のままでありたいと思う」<sup>6</sup>のです、と。粉挽きやの世界論は確信に充ちている。「教会の教える律法と戒律はすべて売り物であり、教会はそれで生きている。…私の精神は、ローマ教会がよくないゆえに、ある新しい世界と新しい生き方があることを、…願っているのです。」<sup>7</sup>メノッキオの率直な、したがって強烈な批判を含む発言は、ルターの免罪符事件(1517年)から半世紀以上が立っていた時点の非知識人の思想である。審問官は、一粉挽き屋であるメノッキオがそんなことを考え出す力はなく、異端者の説教の受け売りをしていると考え、その根源の異端者を裁くために、それが誰かを詮索し、その異端者の名前を言え！と迫る。「私は異端であるだれかのところへ行っただけではありません。私は精妙な脳味噌をもっていて、私がよく知らないような程度の高いことを思索したくなるのです。しかし私が行ったことが真実であると信じている訳ではなく、私は聖なる教会に従おうと思っています。…もし私が真実を言っていないなら、神と主なるイエス・キリストと精霊のご慈悲に、私を死なせてくださるよう願います。」<sup>8</sup>隠し事を知らない透明で率直な現実認識は、かれの生命を奪うことになるかもしれない言明を通して、民衆がいかに誠実で無垢なひとびとであるかを知らしめる。つまり、審問官はメノッキオに「考えるな！」と要求し、それに対してメノッキオは、「考えてしまうのです。考えてはいけないのなら、生きてはいけませんから、死なせてください」と答えているのである。なんとこの哀しさであろうか！思想の自由や言論の自由は、生きることそのものと同一のことであることを、これほど如実に、誠実に示している例は希有である。近代社会が認める基本的人權の最も核心的な条件こそ、生きる権利としての生存権であり、それと切り離すことができない考える自由、すなわちの思想の自由であり、言語で考える人間にとって、考えることと同義の言論の自由である。それは、高邁な理想なのではなく、他の人と異なる考え・思想は許容されなければならないという人間の在り方の現実認識にすぎないのである。16年間の告発・裁判を経て、死刑執行を躊躇う地方官に対し、メノッキオの悲しい希望を叶えるように、ローマ法王(クレメンス8世)は「民衆の見せしめのために」、即刻処刑することを命じ、メノッキオは処刑された(1599年)。メノッキオの処刑は、言論が生死にかかわることをあらためて刻印した。翌年の1600年には「世界は無限であり、無数の世界が存在する」と説いたジョルダノ・ブルーノ(1548-1600)もまた8年の監獄生活ののち、クレメンス8世(1536-1605)のローマにおいて焚殺された。自然哲学はまことに生命に危機をもたらす危険な作業であった。教会と同じ考えを「正統」となづけて他を否定し、一言一句同じ考えを死をもって強制する思想を、のちにヴォルテールは次のように言って糾弾する。「自分で自分を決定するように生まれついている人間が、どんな権利をもって他の人間と同じように考えることを強制できるというのだ。(傍点引

用者)』<sup>9</sup>

いかなる個人主義への批判を前提としても、個人主義的思想の根幹とも言えるものがその個的「思考」の自律性であり、この構造を批判することなど誰にもできない。生きている限り中枢神経が機能する。それが思考すること、考えることであり、それはいかなる偏見や先入観の支配下にあっても、個的に行われざるを得ないのである。思考は自由に行われるのではない。むしろ明証的な認識は、それ以外の考え方ができない揺るぎない確信をもって、人間を束縛する。それが真実であるかどうかが問題なのではなく、真実だと思ふことが、彼自身の生や生活にとって極めて重要なためである。個々人が考える過程を、他者は制御することはできない。考えながら生きる人間の行動が、すべからくその思想に淵源するために、歴史は、人間の思考の抑圧の歴史である。多くの人々が誤解しているように、思想の自由とは、自由に思考するという意味ではない。誤解を恐れずに言えば、私たちは苦悩や興味の対象を、無意識的な必然性をもって組み立てている。考えるという大脳の機能やその過程(考える機能)を、私たちは考えることはできず、したがって考えの内容そのものを制御することはできない。考えてしまう、というメノッキオの言葉は雄弁である。考える内実を制御できないがゆえに—それは自由という意味ではない—、私たちの思考が他者と異なっても、それは仕方のないことであり、許容されるべきであるという意味で、思考や思想は自由でなければならないのである。危急的状况にあって、左に逃げるか右に逃げるか、それは個々人の判断に依存する。そして個人は、自己の欲求や嗜好、あるいは自己の生命を含めて、利害に関する一切に対して、唯一無二の権威ある判断者である。私たちが基本的人権の最も重要なものの一つとして言及する「思想の自由」、あるいはそれを表出する「言論の自由」は、いずれも政治的スローガンではなく、だれもが有する人間の固有な生理的現象の言明にすぎない。つまり、多様な思想という人間の生理的現実を抑圧してきたそれ以前の歴史を越えるために、近代の市民社会は、この現実認識を社会的レベルで法制化せざるをえなかったのであり、それだからこそ、基本的人権の概念を構成する重要な要素なのである。

セルヴェトのあとを受けて人間の血液循環の機能を実験的に解明したウィリアム・ハーヴェイ(1578-1657)は、ヴェサリウス後も解剖学の高度な伝統を受け継ぐパドヴァ大学に1597年に留学した。1603年イギリスに帰国してジェームス1世(1566-1625)の侍医となり、1628年実験的に弁の機能を追究し、心臓を頂点とする「動物の心臓ならびに血液の運動にかんする解剖学的研究」(1628)を上梓する。「心臓の働きは収縮にあり、したがってその機能は、血液を動脈の中に押し出すことにある。」<sup>10</sup>この血液循環の発見それ自体に宗教性は殆どなかったが、王党派であったハーヴェイは古典的なアリストテレス流の生氣論を主張し、また心臓を王に見立て、血液を従属するものと考えた。「心臓は他の器官に先んじて発現する。すなわち、まず最初に心臓が創造されるのである。そしてこの心臓の働きによって、自然は、動物を一つの全体として作り上げ、これを培育し、保持し、これを完成し、…ちよと国王が国家における第一のかつ最高の権威を持っているのと同様に、心臓は身体全体を支配するのである。」<sup>10</sup>ハーヴェイはこののちチャールズ1世の侍医となる(1631年)。

イギリスにおける宗教戦争は、国王と議会の対立という政治的舞台の上で演じられた。チャールズ1世は、スコットランドとの戦争のための戦費調達に反対する議会派を逮捕しようとして失敗し、逆にロンドンから逃亡した。1643年彼はロンドン奪回を意図して、エセックス麾下の議会軍とオックスフォードで対峙した。このとき、オックスフォード大学にいた

ハーヴェイは避難したが、暴徒に住居を略奪され、彼が書き貯めていた殆ど全部の原稿や資料が失われた。このオックスフォードの戦いで、双方の軍隊に発疹チフスが発生し、チャールズ1世はロンドン侵攻を断念した。しかし翌々年の1645年、国王軍を信仰の敵と考え、戦闘は神のための聖戦であり、地上における神の国の実現であると考えたクロムウェル率いる議会軍は、ネイスビーの戦いで国王軍に壊滅的な打撃をあたえた。敗北したチャールズ1世はスコットランドに亡命したが、身柄を議会軍に引き渡され、遂に1649年に処刑される。時代の子として、この歴史的激動に身を置いていた「ハーヴェイは1628年には心臓を優位に置いていたが、1649年には代わりに血液を重視している。…心臓の至高性は影をひそめ、かわりに『血液の優位性と本来性』という言葉が見られる。『血液はみずからの力で生きかつ栄養を得る。それは身体のいかなる部分にも頼る必要はない。』…今や心臓は血液に従属している。それは王が民のために働くべきなのと同じであった。』<sup>11</sup>このハーヴェイの循環理論の微妙な変化は、時代の変動を経験した所産であったかもしれない。

イギリスにおけるピューリタン革命は、内乱の過程で、議会派内部から、国王との調停を模索する長老派を追い出した。そして内乱終結後も、軍隊内での主導権を掌握するクロムウェルらの独立派(軍幹部を主体)とは異なる派閥、すなわち人民協定(Agreement of the people)を提出するリルバーン(1615-1657)に率いられる水平派(Levelers)や、さらに過激な少数派として、土地の共産的共有を主張するウィンスタンリ(1609-?)を唱道者とする平等派(Diggers)を産み出した。水平派は「人民自身によって支配されるべきであると主張する(軍隊)外部の民主主義者たちと協力しはじめ…万人に公平に分配されている平等の正義、これこそ水平化の目的とするところである。』<sup>12</sup>と明言し、その人民協定には、選ばれた信徒のみではなく、「生まれながら」の人間の権利が自然権として明記され、選挙区の公平な再編成、隔年議会の開催などが要求された。結局、水平派はクロムウェルらの独立派から放逐され、政治的には敗北するが、しかしイギリスにおけるピューリタン革命は、生命の保全という人間の自然権や人民主権、すなわち後の市民(名誉)革命で明文化される理念をカルヴィニズムから捻出していたのである。

人間を含めた自然の対象化による認識革命ともいべき科学革命に貢献した大学として、パドヴァ大学はひととき目立っている。クザーヌス(1401-64)やピコデラミランドラ(1463-94)、あるいはポンポナッティ(1462-1524)そしてコペルニクスという自然哲学の系譜を育んだ人々が学び、ヴェサリウスが人体を解剖し、のちにガリレオが数学の教壇にたち、そしてはるばるイギリスからやって来たハーヴェイが血液循環の法則を実験的に証明する、その背景に屹立するのがパドヴァ大学だった。「科学革命の発祥地を一箇所に限るとしたら、他のどこにくらべてもパドヴァ大学が卓越していると言えるだけのすぐれた発展がそこに見られる。』<sup>13</sup>自由な知的革命に果たした一流大学の影響は、今日の私たちが辿り得ない無形の連関をもって歴史に刻まれている。イタリアのパドヴァ大学が、当時のヨーロッパの知性を代表していた一方で、ローマ教皇庁は、30年戦争(1618-1648)が中央ヨーロッパを侵食している1633年、その精神的権威を一步も譲ろうとせず、自律していく科学思想やそれまでの宗教的世界観の崩壊への危機感を感じつつ、「自然は数学の言語で書かれている」というガリレオを断罪する。

宗教戦争は激化し、フランスではユグノー戦争が勃発し、ドイツでは30年戦争がいつ終わるともなく続いていた。これらの17世紀中判のヨーロッパの悲惨を極めた宗教戦争が人間社会に与えた影響は計り知れず、それは一方で、戦争とともに蔓延する疫病に関する壮大な「疫

学的実験」でもあった。ないがしろにされる人命は、やがて人間の尊厳性への意識を育て、近代の自然思想を賦活するための重要な歴史的背景をなすとともに、殺人以外の手段によって社会的な合意形成に至るべき方法論への深刻な反省を促し、それが近代社会における民主主義的政治手法の確立への動機になったと思われる。

## 7. 歴史的動因としての疫病

多くの歴史書は、人間の争い、闘い、戦争の叙述で満ちあふれ、あたかも歴史の行方が、人間の闘いの勝敗の力学によって決定されてきたかのような文脈として描かれている。しかし、社会や国家の運命に、あるいはまたまた確かに文明そのものの興隆や滅亡の上にも、多くの疫病が極めて重要な影響を与えてきた無数の例がある。にもかかわらず、多くの歴史家が歴史的な文脈の中で疫病を過少評価しているのは、疫病が突如として出現する不可抗力の事象であり、人間を作用因とする事象ではないと考えているからかもしれない。しかし、それは一面的な歴史の理解にすぎず、序章でも述べたように、疫病は人間を作用因とする人間の事象である。マクニールは「疫病と歴史」の冒頭に書いている。「人類が自然界全体のバランスの中で常に変化してやまない特殊な位置を占めている事実に対する一層深い理解こそ、われわれが歴史を考えていく上で不可欠の重要事である」<sup>1)</sup>。人間は、地上に生存していくために莫大な数の動植物を自己のエネルギー源として利用してきた。とくに大型の草食動物を中心に、人間が絶滅に追いやった生物種も、決して少なくないものと思われる。しかし同時に、人間は細菌・ウイルス・寄生虫などの微生物の寄生対象となり、それらの餌食となって莫大な人命が失われてきた。微生物も、感染ないしは寄生という形態で他の生物の生存環境を利用しながら生き延びようとする生物種であるという点において、地上を利用しながら、他の生物という食物に「寄生」しながら生きる人間と基本的には変わるところはない。むしろ人間からみた殺戮者としての「細菌は太古の時代と同様に、われわれ人間よりもはるかに重要な存在なのである。細菌は無限に姿を変えて地球上いたるところに存在して発酵作用と腐敗作用を営み、植物と動物の屍体に保有されている炭素と窒素を遊離している。したがってもし細菌と酵母がなければ、…すべての生命が消滅してしまうことになる。細菌が存在しなければ、この世は過去に生息していた植物と動物群の死骸が良く保存された博物館と化してしまう。(傍点引用者)」<sup>2)</sup>すべての生物に進化があるように、病原体も進化している。人間に影響を与える病原体は、私たちがそれを感知することはないとしても、人間の社会の変化や、人間行動の変化、あるいは生活形態の変化によって影響を受けている。人口を調節してきた三大要因は、飢饉、疫病、戦争といわれるが、これらはいずれも独立した因子ではない。戦争は農村の破壊を通して、飢饉の直接的原因となり、食料不足は人々の栄養失調を通して潜在的な疫病的温床となる。しかしそのことが歴史に叙述されることは稀である。人間の歴史とは、集団間の争いの勝敗の行方より遙かに深刻に、感染症によって影響され続けてきたといえるのである。

一般に、人間が未経験の病原体に初めて遭遇した場合、つまり、免疫のない社会に、あるいは寄生・共生関係が確立していない環境のなかで、「病原体」がもちこまれた時、甚大な被害をもたらす可能性が高い。人間が新しい感染症に遭遇するのは、その生活圏の拡大によっ

て、異なる環境に人間が足を踏み入れる場合である。それが世界的レベルで行われたのが、大航海時代であった。大航海時代以降、世界的な商業世界あるいは交通網が形成されることによって、それまでは地理的に局所的であった感染症(風土病)が、物品や人の移動とともに、遠くに離れた人々の生活にも影響を与えるという古典的な"globalization"が成立した。植民地主義に駆られたこの時代の"globalization"は、感染症の劇的な拡大をもたらし、最も悲劇的には、天然痘(あるいは麻疹)への免疫のなかったアズテクやインカ文明を、スペイン人の侵略的意思のもとに壊滅させた。一方ヨーロッパにおいても「16世紀の初期、梅毒が初めて流行という形をとって出現したときには、梅毒は今日見られる状態よりも、はるかに激しく、急性でそして致命的であった。」<sup>3</sup>病原体と人間との生物学的葛藤の過程は、人間を発病させ、重篤な場合には死に至らしめる。これは病原体からすれば、人間に対する生存競争における勝利といえるが、人間が死亡することは、病原体にとっても生存環境が失われることを意味し、宿命的に病原体も長期的には死滅することを意味する。寄生体として人間を死に至らしめることは、病原体にとっても最良の生存戦略とはいえないのである。おそらく、この生物学的生存競争は、病原体が自らの生存を保障するために、その宿主を殺戮しない程度に毒性を緩和し、一方寄生された宿主は抵抗力を高めることによって、やがておだやかな共生関係へと変貌していく可能性を示唆する。このことが、病原体の毒性が弱まっていくことと、永続的な共生関係の成立を説明する。今日常在菌として知られている多くの寄生細菌はそのような数千年にも亘る生物学的相互適応反応の歴史的過去を共有していると見なければならぬ。しかしこれらの「おとなしくなった」常在菌もなお、人間を殺戮する潜在力を持っている。超高齢社会では、抵抗力の弱まった高齢者がこれらの細菌の餌食になっていくことが危惧される。一方で、たとえば「動物から人に」感染する腺ペストと、「人から人に」感染する肺ペストでは、肺ペストの致死率が格段に高いという例からも明らかなように、ある種の微生物は、異なる動物を通過するだけで牙をむく。今日鳥インフルエンザで危惧されているのは、この人から人への感染形態(Phase 6)への拡大である。これらの文脈から明らかなように、人間の歴史とは、人間だけの歴史ではない。人間が、宗教上の意見の違いで殺戮しあい、土地の争奪戦や、王家の威信を巡って殺戮を繰り返している背後で、疫病は、人間の生命を戦争以上に奪っていった。中でも、近代において最も重要であったのは発疹チフスであり、常に劣悪な栄養および衛生環境の中で猛威をふるい、この生物の過酷な生存競争に盲目だったこの時代、発疹チフスで失われた人命を総計すれば、人類が過去に被ったあらゆる疫病の中で、ペストをしのぎ、最高位に位置するだろうとジンサーは言う。そしてこれが最も威力を示したのは、劣悪な環境で殺戮しあう軍隊においてであった。

発疹チフスはリケッチャという病原体によってもたらされる。それは40℃ほどにまで上昇する急激な発熱と、悪寒、頭痛、衰弱で、発病後数日で肩と体幹に発疹が現れ、四肢に拡大して、ついには消耗死するのである。発疹チフスは、虱(シラミ)を媒介として、栄養不良と不衛生の環境のもとで発生し、人間の間で拡大するが、発疹チフスに感染した虱も死ぬ運命にある。結局は虱もまた発疹チフスの犠牲者であり、虱にとって発疹チフスに感染している人間こそが殺戮者なのである。感染した虱は、その糞便中に多くの病原体(リケッチャ)を排出する。糞便中では、病原体は数百日も生き続けることができるし、死んだネズミの中でも数週間生き続けることが報告されている。人間にとっての「発疹チフスは、感染を受けたネズミのノミが初めて人間にたかったときに誕生した。」<sup>4</sup>典型例の確認などの細菌学的知見から、発疹

チフスは15世紀になって初めて流行病としてヨーロッパに出現したが、それ以前にヨーロッパで発疹チフスがなかった訳ではない。「その400年ほど前に、サレルノ近くにある修道院で発疹チフスの集団感染が起こったということを、ほぼ確実に推定できる」<sup>5</sup>という。ヨーロッパにおける発疹チフスの流行はグラナダ陥落後のスペイン内乱において、1489年のフェルディナンドとイサベラの軍隊で発生した。翌年の「1490年の初めに行われた軍隊の閲兵で、將軍達は2万人の兵士が名簿から除かれていることを知ったのであり、このうち3千人はムーア人によって殺され、そして1万7千人は病気のために死んでいた」<sup>6</sup>これから2年後イサベラの援助を受けたコロンブスは、ぎっしりと覚書きが書き込まれたマルコポーロの「東方見聞録」を携えてバハマ諸島に到達した。ジパング(日本)という黄金の国への欲望が、その後次々とヨーロッパ人をアメリカ大陸に惹き付けることになる。1519年、発疹チフスや天然痘が潜在するスペインから、全財産を抵当にいれ、妻を残し、不転退の気持ちでエルナン・コルテスが、10隻の船隊でヴェラクルスに上陸した。彼は、「100人そこそこの船乗りと、508人の兵士をしたがえ…16騎の馬、32の大弓、10門の大砲、何挺かの火縄銃、大型拳銃」<sup>7</sup>を携えていた。しかしこれだけの兵士や火器で数千万人を殺すことは不可能である。このうち、アメリカ大陸では、ヨーロッパ人の略奪や殺戮を遙かに凌ぎ、天然痘や麻疹に免疫を持たなかったインディオ住民の悲劇的な生物学的崩壊が起った。

一方同じ頃、ヴァロア家(フランス)とハプスブルグ家(スペイン)との間で繰り広げられたイタリア戦争においても、発疹チフスが歴史を変える猛威をふるった。1527年カール5世の皇帝軍(スペイン軍)がローマを略奪したあと、教皇クレメンス7世(在位1523-1534)の度重なる要請でローマ指揮下のフランス軍が援軍にきた。フランス軍は、疫病のために戦力が低下してナポリに逃げ込んだスペイン軍を包囲して壊滅させる寸前だった。しかし、夏の沼沢地に設営されていたフランス軍自体に発疹チフスが破壊的な威力で広がり、指揮官と多くの兵士達の命を奪ってしまった。「2万5千の兵士のうち、生存したのは4千人にすぎなかったという。」<sup>8</sup>その4千人も、「殺戮を受けるか、武装解除された後で、農民達の手にかかって死んでいった」<sup>9</sup>これによってカール5世(スペイン)のイタリアにおける覇権が確立し、1530年、カール5世はボローニャで神聖ローマ帝国皇帝の戴冠式を行い、スペイン帝国とともに広大なヨーロッパの主権者となったのである。

戦争は兵隊を必要とする。傭兵制度は、裕福な都市国家が防衛や戦争の必要性のために14世紀以降のイタリアで発達した戦争請負業者という組織によって招集されたが、14世紀の末までに、外国人傭兵たちは傭兵隊長のもとに一括して雇用され、傭兵隊長は土地や財産のない貴族・騎士出身者であった。「傭兵隊長は、単に『契約者』という意味である」<sup>9</sup>15世紀後半以降、封建的人間関係やイデオロギーは別として、中央集権化を進める国王は世襲の封土に定住している領主の兵力を期待できず、また戦費が膨大であるために、軍隊を常備する資力はなく、戦争のたびに傭兵に頼り、戦争が終われば解雇した。殆どの戦争が雇用された兵隊、すなわち傭兵に頼っていた。傭兵になったのは土地もなく定職もない騎士たちであり、「16世紀の末までに、戦争は国際的商売となっていた」<sup>10</sup>徴集される兵士は武器と武装を準備しなければならなかったが、「強くて野心があり良心の呵責のない青年には、社会的階層を上昇するという見込みが十分にあった。俸給は不定だったが、もし、病気と戦闘から生きのび、仲間を盗まれず、金を酒や賭博で失わなければ、略奪品、身代金、戦利品は、独立して自分の仕事を始めるのに必要な資本を提供した。…これらを期待して、人々は兵士になっていった」<sup>11</sup>

不安定な傭兵の俸給は、ときに支払われないことさえあった。生命を賭して闘う兵士が報われないとき、傭兵の群れが如何に凶暴化するかは、1574年、スペインの国家財政破綻による支払い停止によって、3万人を越えるスイス傭兵部隊がアントワープを略奪したことに刻印されている。「もし俸給が支払われないと、彼らは、宿泊している周辺の農民と商人から、生活の糧ばかりでなく、取れるものは何でも徴発した。俸給の支払いを受けなかったスペイン軍がアントワープを略奪し荒らし回った1574年の暴虐は、16世紀後期と17世紀に北ヨーロッパや中部ヨーロッパの無数の都市や村落に降りかかった運命の、最も身の毛のよだつ劇的な一例にすぎなかった。軍隊が大きくなって統制がきかなくなり、報酬はますます不規則になり、非戦闘従軍者の群れとともに、バッタのように地をはいまわり、道筋にあった不運な社会を破壊したのである。」<sup>12</sup>ヨーロッパの重要な金融市場を形成していたアントワープはこののち急速に没落し、アムステルダムに取って代わられる。解雇されるか集団で脱走した兵隊は群れをなして放浪し、徒党を組んで強盗団に早変わりした。「『農民の貯える食料を毎日のように荒らす、それはむさぼり食う虫けらどもだ。…それは国土に群がる敵軍であって、征服した国でそうするように、そこで勝手放題な暮らしをし、施し物という名義で正真正銘の税金を徴収するのだ』。極貧の百姓にとっては、彼らは人頭税より高くついたにちがいない。」<sup>13</sup>田畑の荒廃や食料の強奪は飢饉の発生を助長したし、逆にまた疫病のための斃れる農民によって飢饉を増幅させたと思われる。人間を作用因とする戦争こそ、ペストや発疹チフスをヨーロッパ中に、何世紀にも亘って播種しつづけた原因でもあったのである。

ボヘミアのプロテスタントの叛乱に始まり、30年に亘って戦われた30年戦争(1618-1648)のヨーロッパの年代記は、発疹チフス、ペスト、痘瘡、赤痢、腸チフスなど、疫病の原因は特定できないものの、飢饉、悪疫の流行、そして信じられないほどの残酷な戦争についての悲惨な記録である。それは不潔で低栄養の人間という絶好の生存環境を提供しつづけて、感染症の人間に対する壮大な疫学的実験の様相を呈した。「30年戦争こそは、自然がこれまで人間を対象としておこなってきたうちでも、最大に規模で行われた疫学上の実験であった。…絶えず軍隊が進軍し、また退却し、そして軍隊から離散した兵士、亡命者、遺棄された者達が、遠く、広くさまよい歩いていた。そのために飢饉が起これり人々は食物と保護を求めて、思い思いに徒党を組んで移動していた。人々が行く限り、どこにでも病気が付き従っていた。」<sup>14</sup>「とにかく生き残るために傭兵たちは市民に寄食しなければならなかった。また家が焼かれ家族が虐殺される市民の方は、とにかく生き残るために、傭兵にならなければならなかった。…軍隊は死傷、病氣、落伍、脱走のためにたえず溶けてしまう潮解の状態にあり、その行動は、戦略的計算ではなくて、略奪されていない土地を探すことに支配されていた。」<sup>15</sup>火力や大砲の導入と築城によって、戦闘形態が変わった戦争では、城壁を攻略するための攻城技術が発達し、その優位性は戦争を永続化させた。「従軍病」と呼ばれるものも、発疹チフスが主因であったが、要塞の攻防戦は攻城技術の進歩とともに塹壕技術を発達させ、「退屈で、危険で、恐ろしく不健康なこの種の塹壕戦は、二百年以上にもわたり、ヨーロッパの兵士達のまさに主食」<sup>16</sup>となり、ここで発生した発疹チフスは「塹壕病」と呼ばれるようになった。血で血を洗った宗教戦争に、遂に誰も勝利者のいないことを確認した1648年のウエストフェリア条約で、ようやく「30年戦争が終結したとき、ヨーロッパ大陸の隅々に至るまであらゆる地域が、発疹チフスの感染の病原巣となりうる状態に変わっていた。」<sup>17</sup>今日のように抗生剤による治療方法はなかったため、感染の程度と個々人の免疫抵抗力の強弱で生死は決定した。致死率は高く、中央ヨーロッパの人口は、高い

見積もりでは40%も減少したと報告されている。

膨大な人命の消費と不道德と悲惨さを刻印した30年戦争は、ホブズのいう「万人に対する万人の闘争」の様相を呈し、派閥の信仰の正当性や正義とは別に、最終的な世俗的覇権の確立がいかに不可能なことであるかを新・旧両勢力ともに認識したと思われる。同時に、疫病、殺人、暴行、陵辱で無残に、そして無駄に消費された人間の生命の保存が、いかに大切な基本的な道德律であるか思い出されたはずである。中世の黒死病以来、人々は「メメント・モリ」といって死を考え続けた。それは予期せざる死神の到来に備えた世俗的な心の準備であったにちがいないが、戦争や略奪による死は、人間の世界の、人間の仕業であることは明白だった。この世に生を受けた人間の生命とその保存は、誰もが厳守すべき最も重要な原則であると、多くの人々が考えた筈である。

30年戦争のまっただ中にあり、かつスペインとユトレヒト同盟との80年戦争のただ中にあった1625年、オランダの法学者フーゴ・グロティウス(1583-1645)は、「戦争と平和の法」によって人間社会の客観的認識に基づく自然思想による国際法の存在を訴えた。「私は、キリスト教世界を通じて、野蛮な民族でも恥じるような戦争をする過度の自由がはびこっているのを見た。ささいな理由で、あるいは理由もなしに、武器に訴えた。そして一度武器が取られると、神の法と人間の法に対するすべての畏敬の念は、投げ捨てられた。まさに、人はその時から制約なしに、すべての罪を犯すことが許されたかのように。」<sup>18</sup>つまり30年戦争は、反面教師として、近代の道徳的精神としての、あるいは理性の命令としての自然思想を賦活し、また育んだといってもよいだろう。

30年戦争を典型として、信仰と世俗的覇権を巡る勝者なき殺戮合戦は、その後の政治と宗教との分離を決定づけたヨーロッパの苦い経験であった。そしてそのことが、自立していく近代的個人の成長とともに、政治的意思の決定過程に「民主主義」というプロセスを不可欠の物ものとして選択させた歴史的教訓であったに違いない。

## 注

### 1. はじめに—Public Healthについて—

- 1) たとえば、血液を凝固させる重要な物質であるトロンビンは、プロテインCやトロンボモジュリンと結合すると、血液凝固を溶解させる方向に働く。
- 2) Milestones in Health Promotion: Statements from Global Conferences, [http://www.who.int/healthpromotion/Milestones\\_Health\\_Promotion\\_05022010.pdf](http://www.who.int/healthpromotion/Milestones_Health_Promotion_05022010.pdf). (accessible 2013.3) :1948年WHO憲章の序文で、健康は"a state of completely physical, mental and social wellbeing, not merely in the absence of disease or infirmity"と、期待されるstaticな理想像として定義された。一方1986年のオタワ憲章では、Health Promotionは"the process of enabling people to increase control over, and to improve, their health."と定義され、あらゆる人が追求しうるdynamicな概念に更新されている。
- 3) J・ロック「統治二論」加藤節訳, P.312, 岩波文庫, 2011年:「基本的な自然法によって、可能な限り人は保存されなければならない。」
- 4) 生存権は、今日の基本的人権の類型のなかでは社会権に分類され、その意味するところは、日本国憲法に照らせば、第25条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と規定し、その二項に



「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」とされている。しかし、生存権は、生命を享受する権利であり、歴史的には、生命そのものが脅かされる環境から人命は守られるべきものとして成長してきた。それなくして一切の自由も権利も無意味であるために、あらゆる基本的人権の根幹である。

- 5 D・デフォー「ベスト」平井正穂訳, P.87, 中公文庫, 2009年
- 6 ibid, P.90
- 7 ibid, P.101
- 8 「人権宣言集」都木八尺ほか約, P.130, 岩波文庫
- 9 J・ベンサム「道徳およびお立法の諸原理序説」山下重一訳, 世界の名著38, P81, 1973年
- 10 A・Maddison: The World Economy: A Millennial Perspective/ Historical Statistics (Development Centre Studies) OECD, 2006
- 11 E・Chadwick: Report of the Sanitary condition of the labouring population of Great Britain, P.159, Routledge/ Themmes Press, 1997 (reprint of the 1842 edition)

## 2. 近代的個人と"Public"概念

- 1 J・ハーバーマス「公共性の構造転換」細谷貞雄・山田正行訳, P.38, 未来社, 2011年
- 2 J・ロック「統治二論」加藤節訳, P.406, 岩波文庫, 2011年:「人間はすべて、生来的に自由で平等で独立した存在であるから、誰も、自分自身の同意なしに、この状態を脱して、他者のもつ政治権力に服することはできない。従って、自分の自然の自由を放棄して、政治社会の拘束の下に身を置く唯一の方法は、他人と合意して、自分の固有権と、共同体に属さない人に対するより大きな保障とを安全に享受することを通じて互いに快適で安全で平和な生活をおくるために、一つの共同体に加入し結合することが求められる(傍点引用者)。」
- 3 P・アリエス「子供の誕生」杉山光信・杉山恵美子訳, P.357, みすず書房, 1985年
- 4 J・ブルクハルト「イタリアルネサンスの文化」柴田治三郎訳, 世界の名著45(中央公論社)1966年, P.194以下第二章「個人の発展」参照
- 5 J・ギース/F・ギース「中世」ヨーロッパの農村生活」青島淑子訳P.69, 講談社学術文庫, 2008年
- 6 K・ライトン「イギリス社会史1580-1680」中野忠訳, P.260, リプロポート, 1991年
- 7 ibid, P.261
- 8 F・テンニエス「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)」杉乃原寿一訳, P.113, 岩波文庫, 1975年
- 9 J・J・ルソー「告白」桑原武夫訳, P.5-6, 筑摩世界文学大系, 1974年
- 10 J・ミシュレ「フランス革命史」桑原武夫ほか訳, P.48, 世界の名著37(中央公論社), 1971年
- 11 ibid, P.94
- 12 L・トロッキー「ロシア革命史(一)」山西英一訳, P.168, 角川文庫, 1974年

## 3. 近代の条件

- 1 J・ブルクハルト「ギリシャ文化史I」新井靖一訳, P.110, 筑摩書房, 1995年
- 2 ibid, P.114
- 3 ibid, P.121
- 4 トゥキディデス「歴史」小西晴雄訳, P.240, 世界古典文学全集, 筑摩書房, 1971年
- 5 J・ブルクハルト「ギリシャ文化史I」P.298

- 6 BC489年キモンの父、ミルティアデスはパロス島遠征を失敗して、50タラントンの罰金を支払うことができず獄死した。BC.406年アルギヌーサイの海戦で、嵐のために兵士を救助できずに帰還した将軍6名が処刑された。
- 7 トゥキディデス「歴史」小西晴雄訳, P.226
- 8 J・ブルクハルト「ギリシャ文化史I」P.331
- 9 ibid, P.333
- 10 ペトラルカ「ルネサンス書簡集」近藤恒一編訳, P.67-68, 岩波文庫, 2006年

#### 4. 宗教改革における個人—良心への服従と自己確信—

- 1 M・ルター「キリスト者の自由」石原謙訳, P.21, 岩波文庫, 2004年
- 2 I・モンタネリ/R・ジェルヴァーン「ルネサンスの歴史(下)」藤沢道郎訳, P.60, 中公文庫, 2007年
- 3 ibid, P.61
- 4 M・ルターibid, P.13
- 5 GR・エルトン「宗教改革の時代」越智武臣訳, P.11, みすず書房, 1989年
- 6 ibid, P.5
- 7 ibid, P.30
- 8 ibid, P.31
- 9 GR・エルトン, ibid, P.143
- 10 デカルトは1607年10歳のとき、イエズス会が創設したラ・フレーシュ学院に入学し、1615年に卒業した。

#### 5. 科学革命における個人

- 1 H・バターフィールド「近代科学の誕生(上)」渡辺正雄訳, P.13-14, 講談社文庫
- 2 M・ウェーバー「プロテスタンティズムの精神と資本主義の精神」大塚久雄訳, P.250, 岩波文庫, 1990年
- 3 H・バターフィールド, ibid, P.20
- 4 D・ダニエルソン「コペルニクスの仕掛け人」田中靖夫訳, P.143
- 5 H・バターフィールド, ibid, P.72
- 6 GR・エルトン「宗教改革の時代」P.162
- 7 ibid, P.162
- 8 SM・ルークス「個人主義」間宏訳, P.139, お茶の水書房:トレルチ“The social teaching of the Christian Churches” Vol I, P.328の孫引き
- 9 R・ポーター「人体を戦場にして」目羅公和訳, P.71, りぶらりあ選書, 法政大学出版会, 2003年:イスラム圏では解剖は許されなかった。イギリスで1832年に漸く解剖法が制定された。
- 10 CD・オマリー「ブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス-1514-1564」坂井建雄訳, P.183, エルゼビアサイエンス(株)ミクス, 2001年
- 11 ibid, P.113
- 12 ibid, P.114
- 13 ibid, P.302
- 14 E・フリーデル「近代文化史I」宮下敬三訳, P.243, みすず書房, 1993年
- 15 I・モンタネリ/R・ジェルヴァーン「ルネサンスの歴史(下)」藤沢道郎訳, P.191
- 16 ibid, P.192
- 17 倉塚平「カルヴィニズムの成立」岩波講座「世界歴史14」P.407, 岩波書店, 1969年

18 ibid, P.408

## 6.民衆の覚醒と科学者の変貌

- 1 H・バターフィールド「近代科学の誕生(上)」渡辺正雄訳, P.100
- 2 Nオーラー「中世の死」一條麻美子訳, P.239, 叢書ユニベルシタス821, 法政大学出版会, 2005年) 貨幣には支配者の像が刻まれていたので, 貨幣偽造は大逆罪と同様に処罰された。
- 3 C・ギンズブルグ「チーズとウジ虫」杉山光信訳, P.2, みすず書房, 2003年
- 4 ibid, P.94
- 5 ibid, P.52
- 6 ibid, P.118
- 7 ibid, P.53
- 8 ibid, P.52
- 9 HJ・シュテーリッヒ「世界の思想史(下)」草薙正夫等訳, P.38, 白水社, 1999年
- 10 W・ハーヴェイ「動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究」暉峻義等訳, P.157, 岩波文庫, 1977年
- 11 J・ヘンリー「十七世紀科学革命」東慎一郎訳, P.142, 岩波書店, 2005年
- 12 GP・グーチ「イギリスの政治思想I」堀豊彦・升味準之輔訳, P.58, 岩波現代叢書, 1952年
- 13 H・バターフィールド「近代科学の誕生(上)」P.86

## 7. 歴史の動因としての疫病

- 1 WH・マクニール「疫病の世界史(上)」佐々木昭夫訳, P.30, 中公文庫, 2009年
- 2 H・ジンサー「ねずみ・しらみ・文明」橋本雅一訳, P.45, みすず書房, 1966年
- 3 ibid, P.71
- 4 ibid, P.258
- 5 ibid, P.264
- 6 ibid, P.266:『スペインの疫学, あるいはカルタゴがやってきたときから1801年までの, スペインに発生したペスト, 伝染病, 流行病と動物の伝染病の年代記。そのほかこのような種類の病気の認識を含めて』マドリッド, ドン・マテロ・レブレス版1802年(孫引き)
- 7 E・ガレアーノ「収奪された大地」大久保光夫訳, P.65, 藤原書店, 1991年
- 8 H・ジンサー「ねずみ・しらみ・文明」P.275
- 9 M・ハワード「ヨーロッパ史における戦争」奥村房雄・奥村大作訳, P.54
- 10 ibid, P.58
- 11 ibid, P.58
- 12 ibid, P.58
- 13 M・フーコー「監獄の誕生」田村淑訳, P.80, 新潮社, 1977年
- 14 H・ジンサー「ねずみ・しらみ・文明」P.296
- 15 M・ハワード「ヨーロッパ史における戦争」P.71
- 16 ibid, P.71
- 17 H・ジンサー「ねずみ・しらみ・文明」P.300
- 18 M・ハワード「ヨーロッパ史における戦争」P.51-52

# Development of Public Health in Modern Civil Society Rise of Individualism and the Formation of Modern Citizenship

Akito KAWAGUCHI

## Key Words

Public health, individual, human rights, Reformation, Scientific Revolution

## Abstract

Public health has been the foundation to the development of modern civil society, where human life and health qualify as fundamental human rights. Both individual and science are important keywords for understanding the process of building citizenship in modern society; they are associated with Reformation and Scientific Revolution, which have played pivotal roles in the formation of individualism and scientific epistemology. Calvinists, more than Lutherans, developed individualism by their self-assurance based on religious doctrines, and attempted at changing society through religious struggles based on the ideology of social justice. Simultaneously, Scientific Revolution, along with Reformation, upset Catholic authority in terms of certain paradigm shifts, such as a sun-centered solar system and the human anatomy. Both of these revolutionary changes interacted philosophically to build modern citizenship based on epistemological transformations. Society found out natural right of public, who became convinced in the human right that “every single human life should be preserved,” which motivated the modern social movement on public health.

